

特集

量と質を架橋する

——混合研究法 (mixed methods research) の可能性

社会調査の方法は、それぞれの方法論が深化するに伴って、たとえば計量系なら計量分析、フィールドワーカーならフィールドワークの先端的手法の習得だけで手いっぱいになりつつある状況が生まれ、専門分化が進んでいるようにも見える。そんな状況への反省的な動きの1つとして、量的方法と質的方法を組み合わせる調査研究法についての議論が、欧米で活発化している。近年の議論では、これまで様々な呼び名が与えられていた量・質混合の調査研究法はほぼ“mixed methods research”の名称で統一されてきており、専門ジャーナルやおびただしい数のテキストが刊行されている。日本にはそうした議論はまだ十分には伝わっていなかったが、ようやくそのテキストも翻訳されるなど、徐々に注目が集まりつつある。そこで、社会調査の専門雑誌である『社会と調査』でも、この混合研究法の可能性と現状について取り上げてみたい。

(中村高康)



1
特集論文

混合研究法の基本的理解と現状評価

中村高康 (東京大学大学院教育学研究科教授)

1 方法論的運動としての混合研究法

量的方法と質的方法を両方組み合わせて用いる研究というのは、それだけでは決して新しいものとはいえない。これまで実践としての量質混合の研究はたくさんあったし、むしろ厳密に考えれば、純粋な量のみ、純粋な質のみ、純粋な質のみの研究というものがかえって難しいとさえいえる。とりわけ人文社会系の分野では、量的なデータは質的な内容を伴った解釈がなされるのが通常であるし、質的なデータにも、量的なスケールの判断がしばしば持ち込まれたりするからである。つまり、量質混合の研究は、研究実践レベルにおいては、とりたてて議論するまでもなく、すでに大量に存在してきたのである。

しかしながら、なぜか海外では混合研究法 (mixed methods research) の議論が近年になってきわめて盛んになってきた。これは事実としては疑いえない。関連書籍の刊行 (mixed methods で検索してみれば、近年になって大量の書籍が刊行されていることは一目瞭然である)、専門雑誌 (*Journal of Mixed Methods Research*) の創刊、リーディングスの刊行 (Bryman ed. 2006)、国際会議の開催 (Mixed Methods International Conference) など、大きなうねりが生まれている様相さえある。

このような動きが生じる背景には、量質混合の研究が、研究実践レベルで個々の研究者の裁量にまかせて行われるだけで、1つの研究方法論として正面から取り上げて議論されてはこなかった、という事情がある。混合研究法の議論をリードするタシャッコリとテドリーがこうした一連の動きを「第三の方法論的運動 (third methodological movement)」(Tashakkori and Teddlie eds., 2003) と呼ぶのは、まさに方法論としての体系的議論が欠如していた量質混合の調査研究法に体系性を与え、これを積極的に推し進めようという意図が表現されている。

なぜそのような運動が近年生じてきたのだろうか。これはかなり推測を含んだ私なりの解釈になるが、人文社会科学全般にわたって幅広い影響を与えたポストモダン思想の退潮があり、それと入れ替わるようにして人文社会系諸分野における政策的・実践的志向の高まり (たとえば、臨床〇〇学の隆盛を思い浮かべてもらえばわかりやすい) があることが関係しているように思われる。

混合研究法は実践的志向の強い分野での普及が早かった (中村, 2007)。教育、看護、健康科学などである。目の前に具体的な解決すべき課題があるときに、私たちはしばしば多角的に考える。なぜなら、具体的な課題解決のためには当該現象の全体像の理解が不可欠

だからである。実践においては、1つの方法から得られた限定的情報だけでは、具体的にどのように行動すべきかということの総合判断がつきにくいのである。一方、アカデミックな世界でのフロンティアの開拓を目指すことが主眼の研究であるならば、現象の特定の側面のみにあえて注目して、そこを精緻に分析するほうが有効である場合も当然ある。

しかしながら、もし前者のように量質混合の研究が有効である文脈があるのであれば、当然ながらこれは積極的に進めるべきであり、そのための方法論的論議も必要となるだろう。

本稿を含む5つの特集論文は、様々な角度から量的方法と質的方法を組み合わせた混合研究法について考察する論文が集められている。混合研究法の国際的動向については大谷論文で詳細に紹介していただいた。続いて、量的方法と質的方法の混合について比較的自由的な議論が行われてきた3つの領域から3名の方々に論文を寄稿していただいた。早くから量質混合の研究法が自然に実践されてきた都市社会学の視点から考察した後藤論文、方法論的議論が活発な看護研究の分野の視点から論じた高木論文、教育社会学での実践例を踏まえて混合研究法について論じる片山論文である。いずれの分野も、具体的な「現場」を抱えていることは、混合研究法の実践を促す要因になりえているように思われる。

特集冒頭の本稿では、以降の議論の前提となる混合研究法の基本的事項を簡略に紹介するとともに、その現状について若干の批判的議論をすることで、特集の前座の役割を果たしたいと思う。

2 混合研究法の基本的理解

❖ 定義と名称

あらためて混合研究法の定義を確認しよう。*Journal of Mixed Methods Research* の創刊号の冒頭論文には、次のような緩やかな定義が暫定的に採用されている。すなわち、混合研究法とは「単一の研究あるいは一連の調査プロジェクトの中で、調査者が量・質両方のアプローチ・方法を用いて、データを収集・分析し、知見を統合し、推論を導き出していく研究」（引用者訳）である（Tashakkori and Creswell, 2007: 4）。ここでは発展途上の混合研究法を厳格な定義で縛りつけたくないという意図が込められているが、彼ら自身も重要なポイントは integration であるとも指摘している。つまり、単なる手法の併用の推奨ではないということである。この点については私も思うところがあるので、のちに触れたい。ただ、私たちが量と質を混合させる局面は多様であり、データ上の場合もあれば、方法や手順の場合もあれば、推論や結論段階の場合もある、ということだけをここでは確認しておきたい。

なお、日本では佐藤郁哉が Brewer and Hunter (1989) の議論に言及しながら「マルチメソッド」なる用語を早くに紹介したこともあり（佐藤, 1992）、ある時期までは量質混合の研究は「マルチメソッド」なる用語の範疇におさめられていた。しかしながら、当のブリューワーとハンター自身が混合研究法のハンドブックに寄稿していることに象徴されるように、量質混合の研究法はほぼ mixed methods research で統一されてきている。日本でも、mixed methods research の訳語

は様々であったが、混合研究法テキストの初邦訳『人間科学のための混合研究法』(Creswell and Plano Clark, 2007)の出版や複数の論稿で「混合研究法」の訳が使われてきた影響もあり、表現としては「混合研究法」でおおむね定着しつつある。本特集のサブタイトルに「混合研究法」を採用したのもそうした判断による。

❖ 認識論的前提

混合研究法の推進者たちはしばしば次のように整理する。質的方法はポストモダン思想の流れを受けた構成主義的な認識論的枠組みに基づいて行われることが多いのに対して、量的方法は実証主義的枠組みで行われる、その結果として「認識論的な前提が違うのだから両者は両立しえない」という批判が生まれる、と。

こうした議論に対して、混合研究法の推進者たちがしばしば持ち出してくる認識論的枠組みとして、プラグマティズムがある(たとえば近年では Teddlie and Tashakkori, 2009)。プラグマティズムについて十分に紹介できるほどの哲学的素養が私にはないが、パースのプラグマティズムの格率と呼ばれるもの——すなわちある概念の対象が生み出す結果を考えたとき、その結果こそがその当の概念のすべてだ、とする認識——を思い起こせば、プラグマティズムは「実用主義」と翻訳できるほど単純なものでないだろうし、そうした単純化された議論では問題が解決できないことは容易に予想できるところである。

❖ 混合研究法の特質

混合研究法はあくまで量的な方法と質的な方法を組み合わせるものである。したがって、量的な方法同士を組み合わせたり、質的な方

法同士を組み合わせたりするものは含まない。それはさきほどの定義からも導かれるところである。

では、混合研究法の議論においては、どのようなことが基本として強調されているのだろうか。大まかには、次の4点が指摘できる(中村, 2007)。

(1) 単一の研究においてミックスする

同じ研究対象に対して、別々に行われた研究の結論のみをミックスするよりも、1つの研究ないしプロジェクトの中でミックスすることのメリットを追求する必要がある。

(2) 研究課題(リサーチ・クエスション)に応じてミックスする

さきほども述べたように、ある特定のアカデミックな命題を検証するのが目的の研究であれば、量的方法と質的方法を無理してミックスする必要はまったくない。要は、設定された研究課題(リサーチ・クエスション)に応じてミックスすればよい。

(3) 各方法の利点を生かし、弱点をカバーするようにミックスする

量的方法と質的方法を適当に混ぜ合わせるだけでは、必ずしも研究上のメリットを十分に引き出せない。設定された課題、扱う研究対象の特性なども勘案しながら、効果的な組み合わせを選択することが、混合研究法では要請されている。

(4) 方法技術だけでなく、問題設定から結論の推論段階まで含めてミックスする

これは混合研究法において常に要請されている課題ではないが、さきほど述べた実践的課題解明を主題とする領域などでは知見の総合化が求められるため、部分的なミックスではなく、研究プロセスのあらゆるところで量的研究の発想と質的研究の発想の統合が目標とされることが多い。

❖ 混合研究法の類型論

紙数の制約があるので簡略な紹介にとどめるが、混合研究法の議論では、どのような混合研究法の類型があるのかをめぐっても非常に活発な議論がある。その中でも、混合研究法の類型論の発展にとりわけ寄与したのが、Morse (1991) によって導入された表記法である。具体的には、量的方法を QUAN、質的方法を QUAL とし、重点を置いていない方法は小文字表記し、時間的に並行している場合は +、連続している場合は → で表記するというものであった。たとえば、量的調査を行った後で補足的に質的インタビューを行う場合には、QUAN → qual となる。これが非常に便利ということで、定着・発展することになったのである。私自身はシンプルにイメージしやすい Johnson and Onwuegbuzie (2004) のモデルを普段は紹介しているが (中村, 2007)、もう 1 つの簡略なモデルである Creswell and Plano Clark (2007) の 4 類型では、さらに埋め込みデザインが考案され、埋め込まれる方の方法を () で囲む表記法が考案されている。詳しくは翻訳書をご参照いただきたい。

3 混合研究法の私的中間評価

混合研究法は、その名称こそ定着してきているものの、その内容は推奨者たちの数の増加の勢いほどには明確な方法論へと発展しているわけではない、というのが私自身の現状評価である。しかし、個人的には、この方法論的議論の方向には、相当のニーズがあるように感じている。そこで、混合研究法の今後を占ううえで私が検討すべき課題と考えているポイントを、3 つほど指摘しておきたい。

❖ 方法を支える哲学

さきほど、混合研究法の背後にある哲学として、しばしばプラグマティズムが指摘されていることを紹介した。しかし、そこでも示唆したように、混合研究法を支える思想としてプラグマティズムが最適なのかどうかについては、もう少し慎重な議論が必要かもしれない。最も懸念されるのは、それが「実用主義」と誤読され、「使える方法はなんでも使おう」というスタンスを安易に正当化する議論が蔓延することである。それは、おそらくこの手の論争の最初にあった素朴な実証主義の立場と変わらない。私自身はもう少し異なる思想的議論から応援を期待できるものがあるようにも感じるのだが、この点についてはまだ十分に検討できていないので、ここではあえて示さないでおく。ただし、すべての調査者がこの哲学的課題を検討し始めるのは生産的でもないので、ここではあえて別の素朴な私的指針を 1 つだけ例示しておきたい。

構成主義的なスタンスをとるにしても、実証主義的なスタンスをとるにしても、それぞれがよって立つ分野ないし研究領域のスタイルに即して、なんらかの理論的・概念的前進を生み出すことを目的とする場合、混合研究法は暫定的に正当化されるのではないかと私は考えている。いま批判した立場との違いがわかりにくいかもしれないが、ポイントは、この考え方は調査方法論を規定する認識論とは無関係だということである。だから、極端にいえば、「実証」とも直接の関係がない。つまり、理論研究でも同じ目的に到達しうる。

社会の「現実」の捉え方は流派によって異なるとしても、その流派の定義するところの「現実」を説明する、一段階以上抽象度の高

い枠組みを追求するという点では、どの流派も同じであろう。そこに貢献することを自覚的に目指すかどうかの方が重要だということである。これはあえてプラグマティズムという用語を持ち出さずとも議論できる話である。

盛山和夫は『社会調査法入門』の中で、ネットワークや労働市場の社会学的研究に大きな影響を与えたグラノヴェッターの「弱い紐帯の強さ」仮説を紹介して、「導き出された理論的含意の大きさが、標本数の小ささを十分に補った」（盛山，2004：63）と評価している。単純化を怖れずにあえていえば、理論的貢献が大きい結果を生み出したので、調査方法の問題は結果的に後景に退いてしまった、ということである。こうした評価の背景にある盛山の調査思想は、研究とは独立して存在するかのような「現実」なるものの理解に重点を置く素朴実証主義でもなく、また法則定立や普遍的知識を拒否する相対主義でもない。社会調査を「意味世界の探求」であり「解釈」だと考える調査観である。

このような調査観に立てば、盛山自身が述べるように、「意味世界としての社会的世界を解釈的に探究するという点において、統計的研究も質的研究も『同じ神』につかえる」（盛山，2004：271）ともいえるのである。盛山の議論が混合研究法と親和的であることは、あえて申し述べるまでもないことである。

私自身は今後の方法論的議論の深化を待つ間、さしあたりこの盛山のような考え方を——あくまで暫定的にはあるが——1つの拠り所として混合研究法に取り組んでいけばよいのではないかと考えている。

❖ 戦略的思考の重要性

以上のような「理論的含意の大きさ」を生み出すためには、問いが重要であることはい

うまでもない。そしてさらに、その問いに適切に答える調査設計も重要になってくる。繰り返しになるが、やみくもに様々な方法を使えるからといってどんどん取り入れていくのは、必ずしも「理論的含意」への最短路とはいえない。

むしろ、こうした計画性・戦略性に乏しい折衷主義的なスタンスは弊害をもたらすことさえある。この点について説得的に論じたのは、佐藤郁哉である（佐藤，2005）。佐藤は定性的研究と定量的研究を併用している研究は、暗黙のうちにそうしている場合が少なくないという。しかし、それでは「トライアンギュレーションの理念からは程遠い、単なる折衷的な研究に終わりがかねない」（佐藤，2005：36）のだという。そこで提起されているのが「戦略的トライアンギュレーション」なのである。さきほど紹介した混合研究法の類型論に基づく調査計画は、量質混合についての事前の計画性を要求されるという意味で、この戦略的トライアンギュレーションの1つの道具となるだろう。

ただし、ここで一点急いで付け加えておかなければならないのは、「戦略的」といっても、最初からガチガチに固めて調査デザインを設計していく、という意味ではないということである。質的研究においてとくに顕著だが、量的研究においても同様に、研究の途上において計画に修正が迫られたり、あるいは研究の性質上あえて探索的に調査を進めたりするということはしばしばある。そうした修正や探索は必ずしも当初の戦略の欠如を示すものではない。もし修正が必要な事態に立ち至ったのであれば、そこから「戦略を練り直す」ということができればよいのである。私自身もそのような経験があるが（中村編，2010，第10章を参照）、重要なことは「理論的

含意」を引き出すための最短路を戦略的に検討して修正するということである。すなわち、むしろ避けるべきなのは、(戦略を欠いた場当たりのな量質混合の研究はいうまでもないが)有効な戦略変更を行えずに量質混合の当初計画を惰性で続けることである。プライマンのリーディングスにも収録されているホワイトの研究は、そうした戦略的計画変更が良くみえる混合研究法の事例として大いに参考になるだろう (Whyte, 1976)。

❖ 類型論を超えて

さきほど、混合研究法の世界では類型論が活発に議論されていることを述べた。しかしながら、リサーチデザイン全体の類型論はやや過剰気味でもあり、また個人的にはこれ以上はあまり必要ないのではないかとも感じる。というのも、混合研究法のデザインは実際にはほぼ無限にありうると考えられるからである。

むしろ、もう少し小さな単位で、具体的な研究上の障害を解決するための組み合わせ方法を、目的別に整理していくことのほうが使い勝手がよいように思われる。

たとえば、質的研究ではしばしば目的的サンプリングが行われる。しかし、目的にかなった調査対象であるかどうかは、調査に入る前に別の情報から措定しなければならない。だとすれば、ここに量的なデータが入ってくる余地はある。つまり、研究によっては、質的調査のサンプリングに量的データを使うことがありうる。また、質的調査のサンプリングが妥当であることを事後的に量的データでチェックするということもありうるだろう。そのときの量的データの使い方は、厳密に言えばこれも無数にありうるだろうけれども、よく使う方法がある程度定型化していくこと

はできるだろう。

また、量的研究ではしばしば解釈が難しい分析結果に出くわすことがある。そうした場合には、分析者はさらに量的データの中に分け入って、そうした結果をもたらす原因を解析していくことになる。しかし、サーベイでは用意できる変数に限りがあるのが通常である以上、その作業はほぼ、ある一定のところまでいくとたいい壁に突き当たる。そして、そこから先はほとんど推測による解釈である。そうであれば、そこに質的情報がきわめて有効に働く可能性がある。片山論文でも示されているように、そのような結果に最も寄与した回答者に、なぜそのような回答になるのかを確かめるインタビュー調査を敢行することも1つの方法である。

大枠の類型論よりは、こうした解決シーズ集のようなものが、今後必要となってくるように思われる。すでに量と質を混合する研究の蓄積は十分あるのであるから、あとは整理する作業ができれば、後続の混合研究法の利用者にとっての利便性は格段に向上するのではないだろうか。

4 おわりに

その方法論的成熟度がまだ不十分であったとしても、とにかくも混合研究法が欧米で注目されてきたのは、その背後にニーズがあったからにほかならない。そのニーズをうまく救い出せる方法論的議論ができるかどうかは今後の社会調査に関わる者、とりわけ混合研究法に関心を寄せる研究者たちの課題であるといえよう。

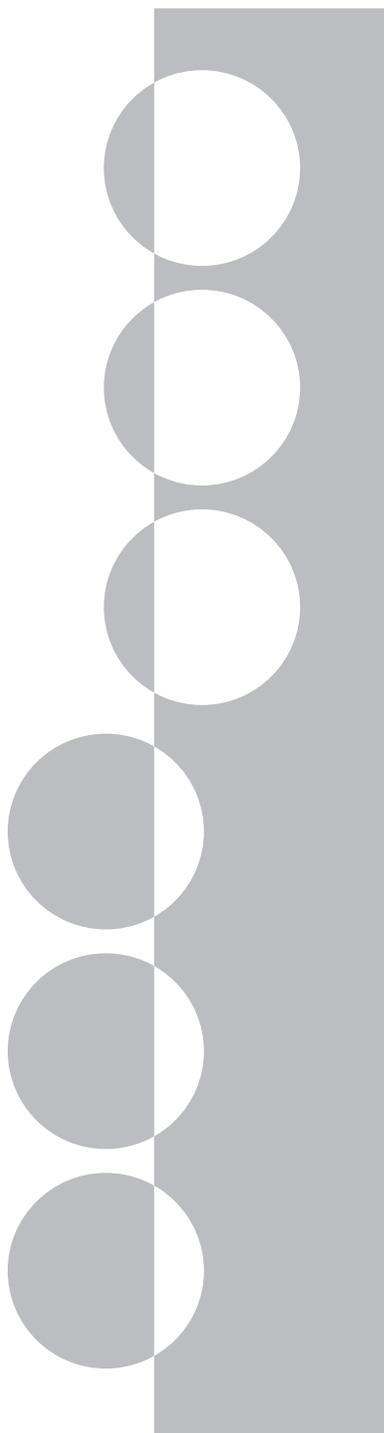
量と質の間を架橋する試みと親和性のある方法論は、さらに広い文脈でみれば多くある。計量テキスト分析やブル代数分析、グラウ

ンデッド・セオリー・アプローチなども、そうした議論の中で取り上げて位置づける必要があるかもしれない。そうした広い文脈での方法論的議論も含めた、今後のさらなる混合研究法の発展の可能性に現時点では期待しつつ、私自身も混合研究法の実践をさらに積み重ねていきたいと考えている。

文献

- Brewer, J. and A. Hunter, 1989, *Multimethod Research: A Synthesis of Styles*, Newbury Park, CA: Sage.
- Bryman, A. ed., 2006, *Mixed Methods*, v. 1-4, London: Sage.
- Creswell, J. W. and V. L. Plano Clark, 2007, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Thousand Oaks, CA: Sage. (大谷順子訳, 2010, 『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究モデル』北大路書房。)
- Johnson, R. B. and A. J. Onwuegbuzie, 2004, "Mixed Methods Research: A Research Paradigm Whose Time Has Come," *Educational Researcher*, 33 (7): 14-26.
- Morse, J. M., 1991, "Approaches to Qualitative-Quantitative Methodological Triangulation," *Nursing Research*, 40(2): 120-23.
- 中村高康, 2007, 「混合研究法——mixed methods research」小泉潤二・志水宏吉編『実践的研究のすすめ 人間科学のリアリティ』有斐閣, 233-47。
- 編, 2010, 『進路選択の過程と構造——高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房。
- 佐藤郁哉, 1992, 『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』新曜社。
- , 2005, 「トライアンギュレーション(方法論的複眼)とは何か?」『インターナショナル・ナースングレビュー』28(2): 30-36。
- 盛山和夫, 2004, 『社会調査法入門』有斐閣。
- Tashakkori, A. and J. W. Creswell, 2007, "The New Era of Mixed Methods," *Journal of Mixed Methods Research*, 1(1): 3-7.
- Tashakkori, A. and C. Teddlie eds., 2003, *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- Teddlie, C. and A. Tashakkori, 2009, *Foundations of Mixed Methods Research: Integrating Quantitative and Qualitative Approaches in the Social and Behavioral Sciences*, Thousand Oaks, CA: Sage.

Whyte, W. F., 1976, "Research Methods for the Study of Conflict and Cooperation," *The American Sociologist*, 11 (4): 208-16.





2 混合研究法の国際的動向

1 混合研究法の歴史概要

本稿では混合研究法の国際的動向について英語圏を中心に紹介したい。近年、多くの研究者がその著書で、混合研究法を用いた調査研究を独立した研究方法論やデザインとして擁護し始めた。Tashakkori and Teddlie eds. (2003) は混合研究法を用いた調査研究を「第三の研究方法論運動 (third methodological movement)」と呼んでいる。これは、研究手法論の進展において、混合研究法がいまや量的アプローチと質的アプローチに続く、第三の運動として続いていることを意味する。述べるまでもなく、多くの研究者がこの二、三十年の間に進展してきた混合研究法を用いた調査研究に関心を抱いている。

混合研究法を用いた調査研究の歴史の概要については、Tashakkori and Teddlie (1998) がまとめている。1950年代に始まり60年代までを形成期 (Formative Period)、70年代および80年代をパラダイム議論期 (Paradigm Debate Period) としている。80年代の関心ごととは混合研究法研究をデザインするための研究手法や手順へと移り始め、89年に、評価分野の3人の研究者——グリーン、カラセリ、グラハム——が、混合研究法を用いた調査研究デザイン構築のための基礎になる古典的論

大谷順子 (大阪大学大学院人間科学研究科准教授)

文を執筆したことをもって、手順的發展期 (Procedural Developments) に入った。21世紀に入ると、混合研究法を用いた調査研究に対する関心はますます高まり、研究者らは、混合研究法を用いた調査研究を1つのデザインとして各自が擁護し始める時期に入った。Tashakkori and Teddlie eds. (2003) や Creswell (2003)、さらに Johnson and Onwuegbuzie (2004) に代表される。

Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research (『社会科学と行動科学における混合研究法を用いた調査研究のハンドブック』) という分厚い本 (Tashakkori and Teddlie eds., 2003) は、論争点、研究方法論の課題、様々な専門分野への応用、そして将来の展望などを取り扱った全26章から成り立っている。加えて、Creswell (2003) は混合研究法を用いた調査研究を量的・質的アプローチと並んで第三のアプローチとして並列している。さらに、Johnson and Onwuegbuzie (2004) は、混合研究法を用いた調査研究を教育的研究の正当なデザインとして考慮すべく擁護している。

2

アメリカの医学、教育学、心理学領域における関心の高まり

今世紀に入ってからさらなる展開により、今後の混合研究法を用いた調査研究に対してま

ますます関心が高まっている。たとえば、『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』第1章に紹介されているように (Creswell and Plano Clark, 2007: 訳18-20), 1999年には、アメリカ国立衛生研究所 (NIH) 行動科学および社会科学研究所は質的・混合研究法を用いた調査研究のためのガイドラインを発表し、それには質的・量的アプローチを組み合わせたモデルが掲載されている。2004年夏に、NIHはその7つの研究所の共催で「ソーシャルワークと他の保健医療専門分野における質的および混合研究法を用いた調査研究のデザインと実施」と題したワークショップを開催した。介入研究 (intervention research) における混合研究法を用いた調査研究の使用についても取り上げられた。NIH 調査研究助成金グラント申請書とキャリア開発省申請書に使う様式 PHS398 は、<http://grants.nih.gov/grants/forms.htm> からダウンロードできるが、これをみると申請書の内容は25ページにおよび、研究の目的、背景、デザインと研究手法を説明することになっている。詳しくは『人間科学のための混合研究法』第8章に紹介されている。

アメリカ国家研究審議会 (NSC) は2002年に教育における科学調査研究について議論し、3つの質問に関し調査する必要があると結論づけた。すなわち「記述—何が起きているのか—システムティックな効果があるのか。そして、プロセスあるいはメカニズム—なぜ、そしていかにそれは起きているのか」。これらの質問を組み合わせると、科学的探究調査には量的・質的アプローチの両方を用いることが提唱されていることがわかる。2003年には、アメリカ国家科学財団 (NSF) は質的研究の科学的基盤に関するワークショップを

開催したが、そこでは、質的・量的研究を組み合わせた5つの研究を取り上げている。また、Robert Wood Johnson FoundationやW.T. Grant Foundationなどの民間財団は混合研究法を用いた調査研究に関するワークショップを開催した。

学術誌において発表される混合研究法を用いた調査研究の数は増加し続けている。1995年から2005年の間に社会科学および人文科学の学術誌に掲載された混合研究法を用いた調査研究に関する論文の数は60を超える (Plano Clark, 2005)。

全米教育学研究協会の中に混合研究法を用いた調査研究にとくに関心をもつグループが結成され、その第1回会議は2005年4月にカナダのモントリオールで開催された。

混合研究法を用いた調査研究は、ますます多くの専門分野における研究で応用されている。たとえば、*Annals of Family Medicine* (『家庭医学学会紀要』) 誌は混合研究法を用いた調査研究を取り上げた特別号を刊行した (Creswell et al., 2004)。*Journal of Counseling Psychology* (『カウンセリング心理学』) 誌もまた質的および混合研究法を用いた調査研究を取り上げた特別号を刊行した (Hanson et al., 2005)。医学の伝統的な実験的試験 (trial) においても、ますます質的データの使用が求められていることは、*Journal of American Medical Association* (『全米医学協会』) 誌 (Flory and Emanuel, 2004) や *Lancet* (『ランセット』) イギリスの権威ある医学誌) 誌 (Malterud, 2001) といった権威ある学術誌においても報告されている。混合研究法を用いた調査研究の多岐の専門分野にわたるレビューも行われている (Greene et al., 1989; Creswell et al., 1996; Plano Clark, 2005)。

3

Journal of Mixed Methods Research (JMMR) の刊行と国際学会の開催

2005年秋に、Sage 出版社（イギリスをはじめ英語圏の社会科学研究方法論分野における代表的出版社）は、*Journal of Mixed Methods Research (JMMR)* という学術誌の刊行準備を開始した。この学術誌は混合研究法を用いた調査研究やその研究方法論に関する議論のみを発表するために刊行されたものである。監修編集者は J. W. クレスウェルと A. タシャッコリであり、V. L. プラノクラークが管理編集者をしている。2007年1月に創刊号が刊行された。本誌の原稿募集要項には、「混合研究法を用いた調査研究の定義は調査者が1つの調査研究あるいは探索プログラムにおいて量的・質的データを収集し、分析し、混合し、推理を引き出すところの研究である」としている。*JMMR* は刊行以来、毎年4巻のペースで刊行されており、毎回、クレスウェルやタシャッコリらによる Editorial が掲載され、混合研究法について論じた論文や、教育や保健またその他の分野で行われた混合研究法を用いた論文が掲載されている。また、Excel, Atlas.ti, WordStat, NVivo, MaxQDA, CAQDAS-GIS などのコンピュータ分析ソフトを1つずつ取り上げ紹介している。さらに、混合研究法の新刊についての書評も掲載している。*JMMR* は <http://mmr.sagepub.com> よりダウンロードできる。

混合研究法を用いた調査研究に対する関心は、国際的に広がっている。2005年7月に第1回 Mixed Methods Conference（混合研究法学会）がケンブリッジ大学で開催された。この学会は当大学保健学部（Homerton School of Health Studies）の主催で、100人以上の混合研究法を用いている調査者や研究方法研究

者が集った。05年8月にはスイスのバーゼルで、招待された参加者限定であるが混合研究法研究会が開催された。混合研究法学会はケンブリッジで毎年6月か7月頃に継続開催された後、09年の第5回はイギリス Leeds 大学の主催で Harrogate において学会とワークショップが開催された。10年にアメリカのカリフォルニアにおいて Leeds 大学とアメリカ Johns Hopkins 大学により共同開催され、その後は、Leeds 大学健康科学部において継続して開催されている。13年の大会は6月25日から27日に Leeds 大学で開催される。14年はアメリカかオーストラリアで、また15年は Leeds 大学で開催する方向で準備調整が進んでいる。

4

混合研究法の各専門分野への応用

今日、混合研究法を用いた調査研究による異文化間比較の国際的関心、複数の専門分野にまたがる関心の高まりとともに、論文発表の可能性、公的および民間研究資金助成の可能性が高まっている。

そして、混合研究法を用いた調査研究が異なる専門分野のコンテキストにおいて応用可能であることの検証にますます関心が高まっている。『人間科学のための混合研究法』の第10章で紹介しているように、多くの近年の学術的な仕事が異なる専門分野のパースペクティブからの混合研究法を用いた調査研究について論じてきた。たとえば、*Handbook of Mixed Methods in Social and Behavioral Research* (Tashakkori and Teddlie eds., 2003) は専門分野ごとの適用と混合研究法を用いた調査研究の例を述べる7章を含んでいる。これらの章は以下の内容を取り上げている。評価の専門に関連した課題 (Rallis and

Rossman, 2003), マネージメントと組織に関する研究 (Currall and Towler, 2003), 健康科学 (Forthofer, 2003), 看護学 (Twinn, 2003), 心理学的研究 (Waszak and Sines, 2003), 社会学 (Hunter and Brewer, 2003) そして教育学 (Rocco et al., 2003) である。その他の先行研究にも、特定の分野での混合研究法を昇華し、その専門分野コンテキストにおいて使用されているものもある。広範囲の専門分野においてあるが、たとえば、コミュニティと地域計画 (Gaber and Gaber, 1997), 教育政策 (Creswell, 1999), スポーツファン研究 (Jones, 1997), プライマリーケア研究 (Stange et al., 1994), 医療サービス研究 (Johnstone, 2004), 老年保健学研究 (Weitzman and Levkoff, 2000) がある。

5 混合研究法に関する書籍

混合研究法に関して書籍として刊行されたものを中心に文献リストをあげる。ほとんどは、大学院教科書として用いることができるような書籍である。また、混合研究法を用いた研究の博士論文を刊行しているものもあり、ProQuestの博士論文シリーズとして刊行されている。

代表的なものとしてはやはりクレスウェルやタシャッコリの著作を手取るべきであろう。Tashakkori and Teddlie (1998) の *Mixed methodology* は、Sage社の社会科学研究方法の教科書シリーズとして刊行された(この教科書シリーズは数々の名著が出ているシリーズで手に取りやすいサイズの本である)が、いまなお古くはない。中国語翻訳版が2009年に刊行されるなど、各国語に翻訳されている。さらに、Tashakkori and Teddlie eds. (2010) の *Sage Handbook of Mixed Methods* 第2版

は1000頁近いバイブル的な参考書である。2003年の第1版から改訂された。Creswell (2013) の *Research Design* は第4版であるが、初版になかった混合研究法という言葉が2003年刊行の第2版、さらに08年刊行の第3版で用いられている。第2版は『研究デザイン——質的・量的・そしてミックス法』として和訳刊行されている。本書はベストセラーの教科書であり、世界各国語に翻訳されている。第3版では、教員用のサイトと学生用のサイトとして、ホームページが用意されていた。教員用のサイトではPowerPointSlideのセットや、研究計画書のサンプルなどもダウンロードすることができた。第4版では、研究倫理に関する記述を追加し、混合研究法の世界観について加筆されている。

クレスウェルとプラノクラークの *Designing and Conducting Mixed Methods Research* は2007年の初版と2011年の第2版がある。初版は『人間科学のための混合研究法』として和訳刊行されている。本書の内容については一部、本稿においても紹介しているが、他にも、混合研究法の論文執筆のためのタイプ別の雛形なども提供しているなど盛りだくさんの内容である。第2版では初版で紹介された混合研究法の基本型4タイプに2つの発展型タイプが追加されているが、基本は変わらないことを原著者とも確認をした。さらに、プラノクラークとクレスウェルは2007年にリーダー教科書として、すでに刊行された混合研究法の論文や書籍の章のコレクションを刊行しており (Plano Clark and Creswell eds., 2007), こちらも参考書として役に立つ。14の基本的論文や章と、9つの具体例としての論文が掲載されている。またビジュアルな図を用いた説明も理解を助ける。

他にも、文献リストにあげているように多

くの研究者が混合研究法について書いている。哲学的なものから実用的なものまで、スタイルや焦点は異なるので、ご自分の分野に参考になりそうな読みやすそうなものから読んでみるのもよいだろう。分野的には、教育学、心理学、健康科学などが多いが、別の分野のものも参考になることも多いので、分野をまたいで手に取ってみることをお勧めしたい。

子どもの発育に関する研究では Weisner ed. (2005), Li (2011), スポーツや体育教育、ダンスに関する研究では Camerino et al. eds. (2012), ストレスに関する研究では Colloins et al. eds. (2010), カウンセリングに関する研究として Sheperis et al. (2010), 博士課程高等教育に関する研究として Ivankova (2009) などがある。Weisner ed. (2005) は、人間開発、教育、社会福祉など、コミュニティにおいて子どもの生活の改善を試みる専門領域を横断的に取り扱っている。Li (2011) は西洋のエビデンスが中国コンテキストにおいて成立するか調査を試みたものであり、異文化間比較の国際的関心の一例であろう。Camerino et al. eds. (2012) では、スポーツやダンスなどの事例を取り上げ、グループの中で相互作用のパターンを探知し、教師やコーチによる非言語的コミュニケーションを用いた体育教育を取り扱う研究を行ううえでの混合研究法について論じている。Sheperis et al. (2010) では、カウンセリングに関する研究における倫理や異文化の課題についても論じ、またコンピュータソフト SPSS に実用的ガイドも収録している。

教育学分野における混合研究法の著書としては、ジョンソンとクリステンセンの *Educational Research: Quantitative, Qualitative, and Mixed Approaches* が 2012 年に第 4 版を刊行されている（第 3 版は 2008 年、第 2 版は

2004 年）。さらにクレスウェルも 2004 年に *Educational Research: Planning, Conducting, and Evaluating Quantitative and Qualitative Research* 第 2 版を刊行している。メルテンスも 2009 年に *Research and Evaluation in Education and Psychology: Integrating Diversity with Quantitative, Qualitative, and Mixed Methods* という教育学と心理学の分野での著書の第 3 版（2004 年に第 2 版）を刊行している。とくに障害者学生の教育について取り上げ、障害者のための特別教育や教育技術の他、聴覚障害者の学生寮における性的いじめについても取り上げ、フェミニスト、マイノリティ、先住民、障害者について論じている。他に、混合研究法を用いた教育学や心理学分野の博士論文を、ProQuest の博士論文シリーズとして刊行した、Kaur (2011), Johnson (2011), Knisely (2012), Maddox (2012), McGaha (2011) などがある。

看護学や健康科学分野の教科書として Andrew and Halcomb (2009), 公衆衛生学として Padgett (2011), ソーシャルワークとして Padgett (2008), 保健分野に Sakes and Allsop eds. (2007), エイジングと公衆衛生分野に Curry et al. eds. (2006) などがある。Andrew and Halcomb (2009) では実際の例が取り上げられている。Padgett (2011) は、混合研究法の大学院レベル以上の内容を求める人には物足りないかもしれないが、質的研究に馴染みのない医療専門家が混合研究方法を用いようとするときに便利な入門的な書き方である。精神保健やマイノリティ、女性、ホームレスの研究を行ってきた著者による執筆である。また、博士論文から刊行されたものとして、地域医療制度を扱った Barnes (2011), 防災医療を扱った Prather (2011), 医学教育に関して Zhang (2012) などがある。

犯罪学における研究方法として Lanier and Briggs (2013), 比較政治学では Berg-Schlosser (2012) がある。また、言語学では Calfee and Sperling (2010) などもある。ボランティア学の博士論文としては Grossman (2011) がある。

特定の研究手法から試みられた書籍もいろいろと刊行され始めている。エスノグラフィの教科書シリーズとして、ルコントとシェアンスルが2010年から13年に数冊刊行している。インターネットやメールや電話によるサーベイを用いた研究として、ディルマンらが2006年と09年に刊行している。地理情報システム (GIS) では、質的 GIS として Cope and Elwood eds. (2009) が刊行されている。GIS は定量的空間データを用いて分析するものであるが、どのように質的研究を統合することができるかを説明している。

6 混合研究法を扱う学術誌およびデータベース

これらの書籍の他に、混合研究法研究を扱う学術誌として、たとえば、*Journal of Mixed Methods Research* (Sage), *Quality and Quantity* (Springer), *Field Methods* (Sage), *Qualitative Health Research* (Sage), *International Journal of Social Research Methodology* (Routledge), *Methodology: European Journal of Research Methods for the Behavioral and Social Science* (Hogrefe) などがあるので、これらにも注目していただきたい。

さらに、以下のデータベースから、興味ある分野やテーマにおける混合研究法を用いた論文を検索して見つけてみることも参考になるであろう。Educational Resources Information Center: ERIC; <http://www.eric.ed.gov/>, Psychological Abstract: PsycINFO;

<http://www.apa.org/psycinfo/>, CSA Sociological Abstract; <http://www.csa.com/factsheets/socioabs-set-c.php>, MedLine (National Library of Medicine's PubMed データベースを通してアクセス); <http://ncbi.nlm.nih.gov/entrez/query.fcgi?db>. "mixed methods" というキーワードで検索してみてもいろいろと見つかるであろう。

7 日本での動向

なお、日本での動向についても言及しておきたい。日本語では、クレスウェルの教科書などが邦訳刊行されてきた (操華子・森岡崇記, 2007年; 大谷順子訳, 2010年)。Mixed Methods Research (MMR) の翻訳はミックス法、混合手法、混合研究法など様々であったが、近年、混合研究法に統一されてきたといえよう。私は、神戸の被災地の事例を取り扱った『事例研究の革新的方法』(2006年)では、「混合手法」という名称を用いたが、のちに2010年の訳書『人間科学のための混合研究法』では、中村高康先生とも議論した結果、「混合研究法」という名称を用いることにした。13年9月に刊行予定の授業研究の編著では、混合研究法の章が設けられ (大谷, 2013a), また、13年9月に第3版が刊行予定の『国際保健医療学』でも混合研究法の章が追加される (大谷, 2013b)。さらに、13年10月にはクレスウェルらを招き、「混合研究の国際シンポジウム」が東京で開催される予定である。静岡家庭医養成プログラム, (財)家庭医療学研究所, ミシガン大学, 東京大学の共催であるが、医学領域のみならず、教育学, 人間科学, 社会学, 看護学などからの参加者を予定している。『社会と調査』の特集号をはじめ、日本でも今後ますます議論が増

え、関心が高まっていくと思われる。

文献

- Andrew, S. and E. J. Halcomb eds., 2009, *Mixed Methods Research for Nursing and the Health Sciences*, Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell.
- Barnes, P. A., 2011, *Local Public Health System Partnerships: A Mixed Methods Multi-State Study*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Bergman, M. M. ed., 2008, *Advances in Mixed Methods Research: Theories and Applications*, Los Angeles, Calif: Sage.
- Berg-Schlosser, D., 2012, *Mixed Methods in Comparative Politics: Principles and Applications (Research Methods series)*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Bryman, A. ed., 2006, *Mixed Methods*, v. 1-4, London: Sage.
- Calfee, R. and M. Sperling, 2010, *On Mixed Methods: Approaches to Language and Literacy Research (An NCRL Volume)*, New York: Teachers College Press.
- Camerino, O., M. Castañer and T. M. Anguera eds., 2012, *Mixed Methods Research in the Movement Sciences: Case Studies in Sport, Physical Education and Dance (Routledge Research in Sport and Exercise Science)*, Abingdon, Oxon: Routledge.
- Cheung, C. K. A., 2012, *Experiential Education and Adolescents' Personal and Spiritual Development: A Mixed-Method Study in the Secondary School Context of Hong Kong*, Springer VS.
- Collins, K. M. T., A. J. Onwuegbuzie and Q. G. Jiao eds., 2010, *Toward a Broader Understanding of Stress and Coping: Mixed Methods Approaches (Research on Stress and Coping in Education Series)*, Charlotte: Information Age.
- Cope, M. S. and S. Elwood eds., 2009, *Qualitative GIS: A Mixed Methods Approach*, London: Sage.
- Creswell, J. W., 1999, "Mixed-method research: Introduction and application," in G. J. Cizek ed., *Handbook of educational policy*, San Diego, CA: Academic Press, 455-72.
- , 2003, *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: Sage. (操華子・森岡崇訳, 2007, 『研究デザイン——質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会。)
- , 2004, *Educational Research: Planning, Conducting, and Evaluating Quantitative and Qualitative Research*, 2nd ed., Upper Saddle River,

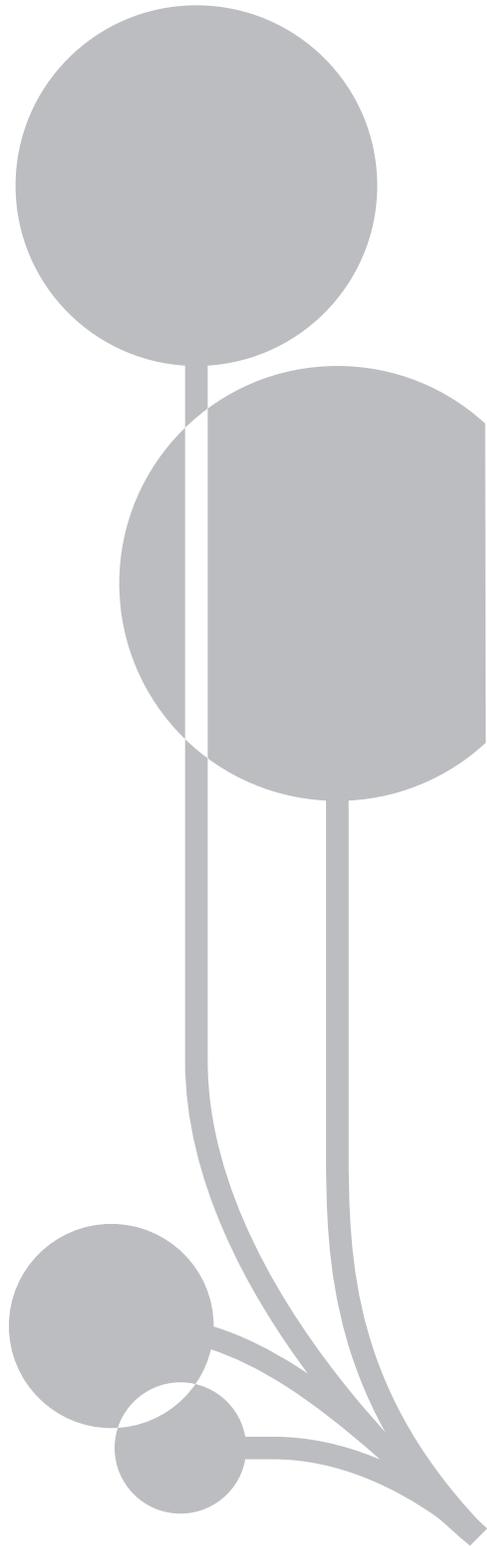
NJ: Prentice Hall.

- , 2008, *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches*, 3rd ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- , 2013, *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches*, 4th ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- , L. F. Goodchild and P. Turner, 1996, "Integrated Qualitative and Quantitative Research: Epistemology, History, and Designs," in J. C. Smart ed., *Higher Education: Handbook of Theory and Research*, V. 11, New York: Agathon Press, 99-136.
- , M. D. Fetters and N. V. Ivankova, 2004, "Designing a Mixed Methods Study in Primary Care," *Annals of Family Medicine*, 2 (1): 7-12.
- and V. L. Plano Clark, 2007, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Thousand Oaks, CA: Sage. (日本語訳, 大谷順子訳, 2010, 『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房。)(中国語訳, 吳璧如審訂; 謝志偉・王慧玉譯, 2010, 《混和方法研究導論》心理出版社(台北)。)
- and V. L. Plano Clark, 2011, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- Currall, S. C. and A. J. Towler, 2003, "Research Methods in Management and Organizational Research: Toward Integration of Qualitative and Quantitative Techniques," in A. Tashakkori and C. Teddlie eds., *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage, 513-26.
- Curry, L., R. R. Shield and T. T. Wetle eds., 2006, *Improving Aging and Public Health Research: Qualitative and Mixed Methods*, Washington, D.C.: American Public Health Association.
- de Leon, A. R. and K. C. Chough eds., 2013, *Analysis of Mixed Data: Methods & Applications*, Boca Raton: Chapman and Hall/CRC.
- Dillman, D. A., 2006, *Mail and Internet Surveys: The Tailored Design Method: 2007 Update with New Internet, Visual, and Mixed-Mode Guide*, 2nd ed., Hoboken, NJ: Wiley.
- , J. D. Smyth and L. M. Christian, 2009, *Internet, Mail, and Mixed-Mode Surveys: The Tailored Design Method*, 3rd ed., Hoboken, NJ: Wiley.
- Flory, J. and E. Emanuel, 2004, "Interventions to Improve Research Participants' Understanding of Informed Consent for Research," *Journal of the American Medical Association*, 292(13): 1593-1601.

- Forthofer, M. S., 2003, "Status of Mixed Methods Research in the Health Science," in A. Tashakkori and C. Teddlie eds., *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage, 527-40.
- Gaber, J. and S. L. Gaber, 1997, "Using Mixed-Method Research Designs in Planning: The Case of 14th street, New York City," *Journal of Planning Education and Research*, 17 (2): 95-103.
- Greene, J. C., 2007, *Mixed Methods in Social Inquiry*, San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- and V. J. Caracelli, 1997, *Advances in Mixed-Method Evaluation: The Challenges and Benefits of Integrating Diverse Paradigms*, New Directions for Evaluation, No. 74, San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- , V. J. Caracelli and W. F. Graham, 1989, "Toward a Conceptual Framework for Mixed-Method Evaluation Design," *Educational Evaluation and Policy Analysis*, 11 (3): 255-74.
- Grossman, H. L., 2011, *Voluntary Stuttering: A Mixed-Methods Investigation*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Hanson, W. E., J. W. Creswell, V. L. Plano Clark, K. P. Petska and J. D. Creswell, 2005, "Mixed Methods Research Designs in Counseling Psychology," *Journal of Counseling Psychology*, 52 (2): 224-35.
- Hesse-Biber, S. N., 2010, *Mixed Methods Research: Merging Theory with Practice*, New York: The Guilford Press.
- Hunter, A. and J. Brewer, 2003, "Multimethod Research in Sociology," in A. Tashakkori and C. Teddlie eds., *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage, 577-94.
- Ivankova, N., 2009, *Students' Persistence: A Mixed Methods Study of a Distributed Doctoral Program in Educational Leadership in Higher Education*, Saarbrücken: VDM Verlag.
- Johnson, A., 2011, *A Mixed-Methods Study Comparing the Perceived Spiritual Benefits of Topical and Extended Scripture Memorization*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Johnson, B. and L. B. Christensen, 2004, *Educational Research: Quantitative, Qualitative, and Mixed Approaches, Research Edition*, 2nd ed., Boston, MA: Allyn & Bacon.
- and A. J. Onwuegbuzie, 2004, "Mixed Methods Research: A Research Paradigm Whose Time Has Come," *Educational Researcher*, 33 (7): 14-26.
- and L. B. Christensen, 2008, *Educational Research: Quantitative, Qualitative, and Mixed Approaches*, 3rd ed., Los Angeles, CA: Sage.
- and L. B. Christensen, 2012, *Educational Research: Quantitative, Qualitative, and Mixed Approaches*, 4th ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- Johnstone, P. L., 2004, "Mixed Methods, Mixed Methodology Health Services Research in Practice," *Qualitative Health Research*, 14: 239-71.
- Jones, I., 1997, "Mixing Qualitative and Quantitative Methods in Sports Fan Research," *Qualitative Report*, 3 (4). <http://www.nova.edu/ssss/QR/QR3-4/jones.html>
- Kaur, J., 2011, *A Mixed Method Case Study: Bar-On EQ-i Framework of Emotional Intelligence and the School Leadership Experiences of Principals Who Completed an Urban Leadership Program in Northern California*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Knisely, A. J., 2012, *An Exploration of the Spiritual Development of Burkina Christian and Missionary Alliance Pastors: A Mixed Methods Study in Adult Education*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Kuckartz, U. and J. Creswell, 2013, *Mixed Methods: Methodologie, Forschungsdesigns und Analyseverfahren* (German Edition), Wiesbaden: Springer VS.
- Lanier, M. M. and L. T. Briggs, 2013, *Research Methods in Criminal Justice and Criminology: A Mixed Methods Approach*, New York: Oxford University Press.
- LeCompte, M. D. and J. J. Schensul, 2010, *Designing and Conducting Ethnographic Research: An Introduction (Ethnographer's Toolkit Book 1)*, 2nd ed., Lanham, MD: AltaMira Press.
- LeCompte, M. D. and J. J. Schensul, 2012, *Analysis and Interpretation of Ethnographic Data: A Mixed Methods Approach (Ethnographer's Toolkit Book 5)*, 2nd ed., Lanham, MD: AltaMira Press.
- Li, H., 2011, *Exploring Resilience among Chinese Adolescents: A Mixed-method Study*, Saarbrücken: LAP Lambert Academic Publishing.
- Maddox, T. R., 2012, *A Mixed Methods Inquiry into the Relationship between Belongingness and Achievement of Middle School Transfer Students*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Malterud, K., 2001, "The Art and Science of Clinical Knowledge: Evidence beyond Measures and Numbers," *Lancet*, 358: 397-400.
- McGaha, J. M., 2011, *Student Perceptions of Reading*

- Motivation in a Voluntary Summer Reading Program: A Mixed Methods Dissertation*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Mertens, D. M., 2004, *Research and Evaluation in Education and Psychology: Integrating Diversity with Quantitative, Qualitative, and Mixed Methods*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- , 2009, *Research and Evaluation in Education and Psychology: Integrating Diversity With Quantitative, Qualitative, and Mixed Methods*, 3rd ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- Morse, J. M. and L. Niehaus, 2009, *Mixed Method Design: Principles and Procedures (Developing Qualitative Inquiry)*, Walnut Creek, CA: Left Coast Press.
- 大谷順子, 2006, 『事例研究の革新的方法——阪神大震災被災高齢者の五年と高齢化社会の未来像』九州大学出版会。(中国語訳, 大谷順子審訂: 徐涛譯, 2010, 『災難後の重生』中国書店(福岡)・南天書局(台湾)。
- , 2013a, 「混合研究法」(第17章), 浅田匡・生田孝至編『科学としての授業研究——実践から学び実践を創る』図書文化社。
- , 2013b, 「質的評価および混合研究法」(第2部第5章), 日本国際保健医療学会編『国際保健医療学』第3版, 杏林書院。
- Otani, Junko, 2010, *Older People in Natural Disasters: The Great Hanshin Earthquake of 1995*, Kyoto: Kyoto University Press & Melbourne: Trans Pacific Press.
- Padgett, D. K., 2008, *Qualitative Methods in Social Work Research (SAGE Sourcebooks for the Human Services)*, 2nd ed., Los Angeles, CA: Sage.
- , 2011, *Qualitative and Mixed Methods in Public Health*, Los Angeles, CA: Sage.
- Patton, M. Q., 2001, *Qualitative Research & Evaluation Methods*, 3rd ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- Plano Clark, V. L., 2005, Cross-Disciplinary Analysis of the Use of Mixed Methods in Physics Education Research, Counseling Psychology, and Primary Care, (Doctoral dissertation, University of Nebraska-Lincoln, 2005), Dissertation Abstracts International, 66, 02A.
- and J. W. Creswel eds., 2007, *The Mixed Methods Reader*, Los Angeles, CA: Sage.
- Plowright, D., 2011, *Using Mixed Methods: Frameworks for an Integrated Methodology*, Los Angeles, CA: Sage.
- Prather, J. W., 2011, *Health Care Disaster Preparedness: A Mixed Method Study of Austere Care Planning in California Counties*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Rallis, S. F. and G. B. Rossman, 2003, "Mixed Methods in Evaluation Contexts: A Pragmatic Framework," in A. Tashakkori and C. Teddlie eds., *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage, 491-512.
- Richards, L., 2005, *Handling Qualitative Data: A Practical Guide*, London: Sage. (大谷順子・大杉卓三訳, 2009, 『質的データの取り扱い』北大路書房。)
- Ridenour, C. S. and I. Newman, 2008, *Mixed Methods Research: Exploring the Interactive Continuum*, 2nd ed., Carbondale, IL: Southern Illinois University Press.
- Rocco, T. S., L. A. Bliss, S. Gallagher, A. Perez-Prado, C. Alacaci, E. S. Dwyer, et al., 2003, "The Pragmatic and Dialectical Lenses: Two Views of Mixed Methods Use in Education," in A. Tashakkori and C. Teddlie eds., *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage, 595-615.
- Saks, M., and J. Allsop eds., 2007, *Researching Health: Qualitative, Quantitative and Mixed Methods*, Los Angeles, CA: Sage.
- Schensul, S. L., J. J. Schensul and M. D. LeCompte, 2013, *Initiating Ethnographic Research: A Mixed Methods Approach (Ethnographer's Toolkit Book 2)*, 2nd ed., Lannam, MC: AltaMira Press.
- Schensul, J. J. and M. D. LeCompte, 2013, *Essential Ethnographic Methods: A Mixed Methods Approach (Ethnographer's Toolkit Book 3)*, 2nd ed., Lanham, MD: AltaMira Press
- Schensul, J. J., and M. D. LeCompte eds., 2013, *Specialized Ethnographic Methods: A Mixed Methods Approach (Ethnographer's Toolkit Book 4)*, Lanham, MD: AltaMira Press.
- Sheperis, C. J., M. H. Daniels and J. S. Young, 2010, *Counseling Research: Quantitative, Qualitative, and Mixed Methods*, Upper Saddle River, NJ: Pearson.
- Spitzlinger, R., 2011, *Mixed Method Research: Qualitative Comparative Analysis* (seminar paper), München: GRIN Verlag.
- Stange, K. C., W. L. Miller, B. F. Crabtree, P. J. O'Connor and S. J. Zyzanski, 1994, "Multimethod Research: Approaches for Integrating Qualitative and Quantitative Methods," *Journal of General Internal Medicine*, 9: 278-82.
- Tashakkori, A., and C. Teddlie, 1998, *Mixed Methodology: Combining Qualitative and Quantitative Approaches (Applied Social Research Methods*

- Series, v. 46), Thousand Oaks, CA: Sage. (中国語訳, 唐海華訳, 2009, 《混合方法論: 定性方法和定量方法的結合》重慶大学出版社。)
- Tashakkori, A. and C. Teddlie eds., 2003, *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- Tashakkori, A. and C. Teddlie eds., 2010, *Sage Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- Taylor, F. S., 2011, *A Mixed Method Analysis of a Service-Learning Program*. Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.
- Teddlie, C. and A. Tashakkori, 2009, *Foundations of Mixed Methods Research: Integrating Quantitative and Qualitative Approaches in the Social and Behavioral Sciences*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- Twinn, S., 2003, "Status of Mixed Methods Research in Nursing," in A. Tashakkori and C. Teddlie eds., *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage, 541-56.
- Waszak, C. and M. C. Sines, 2003, "Mixed Methods in Psychological Research," in A. Tashakkori and C. Teddlie eds., *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage, 557-76.
- Weisner, T. S. ed., 2005, *Discovering Successful Pathways in Children's Development: Mixed Methods in the Study of Childhood and Family Life*, Chicago, IL: University Of Chicago Press.
- Weitzman, P. F. and S. E. Levkoff, 2000, "Combining Qualitative and Quantitative Methods in Health Research with Minority Elders: Lessons from a Study of Dementia Caregiving," *Field Methods*, 12 (3): 195-208.
- Zhang, W., 2012, *Mixed Methods Embedded Design in Medical Education, Mental Health and Health Services Research: A Methodological Analysis*, Ann Arbor, MI: ProQuest, UMI Dissertation Publishing.





都市・地域社会調査における マルチメソッド・アプローチの展開

——数字と言葉と映像の“混合”をいかにはかるのか?——

後藤範章 (日本大学文理学部教授)

1 はじめに

2013年4月、大谷信介(都市社会学)・木下栄二(家族社会学)・小松洋(環境社会学)とともに、『新・社会調査へのアプローチ』をミネルヴァ書房から出版した。社会調査の代表的な教科書の1つとして、多数の読者を獲得してきた『社会調査へのアプローチ』(初版1999年、第2版2005年)を、基本的な骨組みを維持しつつ大幅に書き改めたものである。

量的調査としての調査票調査に軸足を置きながら、質的調査についても相当な頁数を割いて取り扱い(量と質の並置)、バラエティに富んだ実習・実践編を加えるという構成が「基本的な骨組み」となっているが、本特集テーマに照らして、1999年の初版と2005年の第2版と2013年の新版を並べたとき、この10数年の間で興味深い変化が起こっていたことに目がとまる。

一言でいうと、1999年版では量的調査と質的調査との架橋に関する言及が皆無であったのに、2005年版では「マルチメソッド・アプローチ」という用語が登場し、2013年版では「トライアンギュレーション」についても触れるようになっていて、ということである。曰く、「質的調査と量的調査は、異なった魅力、違う強みを持っている。それでは、

両者は別個で、相容れないものなのであろうか。まったくそんなことはない。両者は相補的な関係、まさに『割れ鍋に綴じ蓋』の関係なのだ。なんらかの社会集団や社会事象を総体として研究するためには、量的、質的双方の多様なデータが必要であることは言うまでもないだろう。現在では、このように多様なデータを証拠として社会について考える方法を、トライアンギュレーション(三角測量)と呼び、多くの研究分野で推奨されている」。また、「社会調査は、方法によって定義されるものではない。『社会について考える』ために、量的、質的双方の多様な方法を駆使することはあたりまえのことである」、と言い切っている(大谷ほか編、2013:255-56、引用箇所の執筆担当は木下)。

だが、近年における「混合研究法(mixed methods research: MMR)」の提唱と広がり、単に量的調査と質的調査を併用ないし補完しさえすればよしとする域を、いつのまにか大きく超えているようだ。

ここに至る経緯を振り返り、とくに都市・地域社会調査におけるマルチメソッド・アプローチの展開に着目しつつ、私の調査研究に引き寄せて混合研究法をどのように実践していったらよいかを、やや後衛・後発のポジションから考えてみたい。

2

1970年代以降の量対質をめぐる論争 ——対立から対話へ

量対質をめぐる論争 (Scott and Marshall eds., 2009: 618-19) は、量的研究が実証主義的な認識論に立って、数値データの収集と分析を行うのに対して、質的研究が解釈的な認識論に立って、意味に重点を置き理解することに依拠して主にテキストデータの収集と分析を行うといった、認識論や技法論をめぐる両者の間に横たわる根本的な相違点に根ざした社会科学における方法論上の一大争点を形成した。論争は1970年代に際だつようになった。現象学的なアプローチへの関心の高まりが、自然科学的なモデルの調査への適合性に対する懐疑論につながったのである。その結果、双方の優劣をめぐる党派的な対立が生じ、両者の結合ないし和解は不可能であるとの主張が多くなされた。

しかしながら、他方では、すべての社会学的な調査は幅広い‘socio-logic’の枠組みの内に包含されうるという主張 (Mann, 1981) や、社会科学の調査には種々のスタイルがあるが、科学的な推論のロジックはただ1つだけであって、したがって、良い量的な調査デザインのロジックと良い質的な調査デザインのロジックはけっして異なっていないという主張 (King et al., 1994) 等々が積み重ねられ、「対立」から「対話」への転換が図られていった。そして、両者を実際に架橋する分析の枠組みとして考案された代表例が、トライアンギュレーションというノーマ・デンジンの戦略であった。周知のように、デンジンは、a) 理論トライアンギュレーション、b) データ・トライアンギュレーション、c) 調査者トライアンギュレーション、d) 方法論的トライアンギュレーションの4種類のトライアンギ

ュレーションを提示した (Denzin, 1978: 340)。

a) は同一のデータセットの分析にいくつかの異なったパースペクティブを使うこと、b) はマルチプルなサンプリング戦略を用いてデータを蓄積すること、c) はフィールドで1人以上の調査者を使うこと、d) は同一の課題を研究するためにマルチプルなメソッドを使うこと、をそれぞれ意味する。

わが国においても、若干のタイムラグを伴いながら、ほぼ同様の経緯をたどったとみてよいだろう。管見によれば、この問題にフォーカスが当てられた時期や議論の中身は、研究領域ないし学会ごとにまだら模様を呈していたが、日本都市社会学会が1990年代に行った議論は比較的早い段階でのものであった。私も企画・開催に関与した社会調査をめぐる日本都市社会学会大会での2年連続のセッションを振り返って、「対立から対話への転換」を跡づけておこう。

3

1990年代における日本都市社会学会 の議論 —— 冷戦体制の収束宣言

都市・地域社会研究の古典、リンド夫妻の「ミッドタウン研究」(1929年と1937年に刊行された2冊)が都市社会学者・中村八朗の手による「抄訳」という形で翻訳・出版されたのは、1990年1月のことであった (リンド = リンド, 1990)。青木書店の「現代社会学大系」全15巻の最終刊となったが、その「月報」に、都市社会学者・倉沢進は「社会調査の二つの方法」と題する一文を寄せ、冒頭で次のように述べた (倉沢, 1990)。「今日の実証的社会学のなかで、一つの地域社会を総合的全体的にとらえようとするモノグラフ的な調査と、数個の変数のあいだの関係を分析的にとらえようとする標準化調査との対立がみられる。……(そ)の溝は、むしろ拡がりつ

つあるように思われる」と。

この指摘は、統計的研究法と事例研究法を相互排他的な方法とみなし、それゆえに社会調査を二大別するものであるかのように扱っていた当時の状況が反映している。これに、量と質、仮説検証と事実発見・仮説探索、法則定立と個性記述などといった様々な二分法が重ね合わせられ、勢い、妥当性や信頼性などをめぐって論争を誘発しやすかった。

こうした中、日本都市社会学会が、1994年度の第12回大会で「日本都市社会学における『社会調査』の系譜と課題」と題するシンポジウム（後藤、1994）、95年度の第13回大会で「都市社会調査における質的方法と量的方法」と題するテーマ部会（大谷・後藤、1996）と、2年連続で「社会調査」を大会の主テーマに据えた。シンポとテーマ部会の報告者9名と討論者3名の計12名の多くが、重点の置き所の違いや主張の濃淡はあれ、いずれもモノ（シングル）メソッドではなく量的・質的方法にまたがるデュアルないしマルチプルなメソッドを採るべきことを主張し、「量的／質的のいわば『冷戦体制』」（佐藤健二）を終結させようとする意志がはっきりと示された（後藤、1996：19-20）。その後、石川淳志が「『量と質』『事例と統計』といった従来のごとき単純で不毛な（不幸な）対立の図式を乗り越え」る必要性（石川ほか編、1998：iii）を説き、そこにみられる「恣意的な対称軸を自己増殖させるような循環を切断」（佐藤、2003：10）する動きが活発となり、今日の社会調査界の主導者の1人である盛山和夫をして、「重要なことは、統計的研究と事例研究とは相互排他的なものではないということだ」（盛山、2004：22）といわせるに至った。

「質的／量的の対立的理解の切断と無毒化」（佐藤、1996）が、わが国においては1990年

代中頃を転機として明確な意志に基づいて果たされた、と捉えておきたい。

4 都市・地域社会調査におけるマルチメソッドの水脈——共同調査+総合調査の系譜

量対質の冷戦を無意味化するのに、日本都市社会学会が先導的ないしアクセルを踏み込む役割を果たすことになったのはなぜか。様々な要因や背景を指摘することが可能だろうが、都市社会学や地域社会学の調査がモノメソッドで行われることがそもそもまれであるという調査研究史を有している点も無視できないように思われる。

戦後の社会調査史を彩る代表的な都市・地域社会調査を、いくつか思い起こしてみよう。新明正道グループとそれを継承する田野崎昭夫グループによる釜石調査、福武直グループによる大井町調査、鈴木広グループによる人吉・大野城調査、島崎稔グループによる川崎調査、布施鉄治グループによる夕張調査や倉敷調査、蓮見音彦・似田貝香門グループによる福山調査等々、どれをとっても量的調査と質的調査にまたがる多元的な方法を採用している。しかも、多数の研究者による「共同」調査、社会に関わる「総合」調査が志向された点も共通している。

この際、併せて再認識されるべきは、個々の地域社会を対象とする調査においては、統計的方法を採用しても、それ自体が事例研究としての性格をもつのであって、アウトプットは好むと好まざるとに関わらずモノグラフとなる、ということである。モノグラフをまとめる以上は、諸事象をより広い社会的文脈の中で全体関連的・総合的に捉え分析していくマクロの視点、生身の人間の具体的な営為に即して人間遡及的にみていくミクロの視点、さらにそれらを相互に媒介するメゾの視点と

を重層化させて、それぞれ（扱うデータ）に適した調査方法を多元的に駆使すること、すなわち、「視点と方法の重層化と分析の総合化」が要求されるのである。都市・地域社会調査はしたがって、モノメソッドではなく、量的・質的方法にまたがるマルチメソッドを駆使することが、もともと一般的ななのである。

都市社会学や地域社会学が一定の空間的広がりをもった「地域性」を準拠枠とする限り、「総合社会学」としての性格を有することとなり、「総合的・総体的把握の可能性」によって強みが発揮されるのであり、調査方法にもこの点が反映されるのはいうまでもない。

5 量と質とビジュアルの架橋？——事例としての交通インパクト研究

ここで、私の調査研究を組上に乗せてみたい。私が依って立つ調査のあり方は、問題や事実の発見あるいは仮説発想のための調査活動と仮説の検証や理論化を志向した調査活動とを、同一のフィールドで循環的にしかも可能な限り長期間にわたって積み重ねる（循環的・継続的調査法）とともに、他の地域との比較を重ねていくこと（比較調査法）を基本方針としている。具体的な地域における調査を、様々な技法を駆使して幅広く多面的にじっくりと長期間にわたって継続し、虚心坦懐に事実を観察してみえない部分を1つひとつ穴埋めしていく地道な作業の積み重ねがあってこそ、諸要因・諸要素間の関連性が浮かび上がってくるのであり、様々な問題が発見され、仮説も系統的にテストされるはずである。また、実証的研究からの理論的一般化にあたっては、時間軸と空間（地域）軸に沿った比較の視点と方法が有効であることは、あらためていうまでもない。

そうした中で今回は、本稿のサブタイトル

とする「数字と言葉と映像の“混合”をいかにはかるのか？」を検討する足がかりを得るために、私が1986年に研究を開始し現在も継続中の「交通インパクトの社会的効果に関する研究」を取り上げたい。

1985年に埼京線が開業するまで、市域に鉄道が走っていなかった埼玉県戸田市と、2005年につくばエクスプレス（TX）が開業するまで、同じく市域に鉄道が走っていなかった埼玉県八潮市は、ともに東京都23区に隣接していながら、郊外化（suburbanization）の進展が弱く、「陸の孤島性」が際だっている点に特色が認められた。そこで、両市を対象に据えて、埼京線およびつくばエクスプレスの敷設・開業による交通ネットワークの変容が地域社会にどのようなインパクトを及ぼすのかを実証的に明らかにすることを目的として、以下のような調査を実施してきた（表1）。

1987年度の第1次調査～2008年度の第7次調査のうち、6回がほぼ同一の調査票を用いてのサンプリング調査（量的調査）、1回がケース・インタビュー（半構造化面接に基づく質的調査）となっているが、これとは別に、定点での写真・ビデオ撮影を重ね、ビジュアルデータによる景観や土地利用および空間の構成要素の経年的な変化を捉えることに力点を置いたビジュアル調査も実施している。

ところで、この研究では、交通地理学や交通経済学、交通工学の諸分野を中心とする交通インパクト・スタディーズの先行研究成果の批判的検討ならびに既存統計によるデータ分析などをとおして、次のような仮説を導いている（後藤，1987）。すなわち、東京の都心部を核とする地域的分業体系の中に、なんらかの形で組み込まれている同じ大都市周辺の諸地域の中でも、「交通」網を介しての中心

表1 第1次～第7次戸田・八潮調査の概要

	実施年度	対象地	サンプル数 (抽出方法)	調査の方法	有効回収数 (回収率)	備考
第1次調査	1987年度	埼玉県与野・戸田・八潮市	900 (確率比例抽出)	留置法	618 (68.6%)	ビジュアル調査も実施
第2次調査	1988年度	戸田市 (喜沢・本町・美女木地区)	1,100 (系統抽出)	留置法	660 (60.0%)	ビジュアル調査も実施
第3次調査	1989年度	八潮市 (八条・八潮地区)	800 (系統抽出)	留置法	531 (66.4%)	
第4次調査	1995年度	戸田市 (本町・美女木地区)	900 (系統抽出)	留置法	598 (66.4%)	
第5次調査	1996年度	戸田市 (本町・美女木地区)	17 (注)	詳細なケース・インタビュー		
第6次調査	2007年度	戸田市 (全市)	1,200 (系統抽出法)	郵送法	567 (47.3%)	ビジュアル調査も実施
第7次調査	2008年度	八潮市 (全市)	1,200 (系統抽出法)	郵送法	593 (49.4%)	

(注) 第4次調査で調査票最終頁の自由回答欄に記入している284名の中から、具体的な記述をしている83名を選び出して依頼状を送付し、調査への協力を承諾した17名を対象とした。

都市との結びつきのあり方、それに対応する人々の「交通」関係(社会的交流)のあり方の違いが、各地域社会の社会構造の違いとなって現れる。中心都市との結びつきの度合いは、それへの地理的・空間的距離よりも時間距離と関数関係にあり、「交通」条件の変容による中心都市へのアクセシビリティの変化は、地域社会構造の変動に連動する。ことに大都市圏においては、フィジカルな鉄道交通ネットワークの変容が、中心都市との結びつきのあり方を変えさせ、そのことによって、人口の配置や土地利用のあり方といったサブ・ソーシャルな都市の空間構造ばかりか、社会関係や集団のあり方、階層構成、地域住民の生活構造といったソーシャルな構造までも変動させていくことにつながっていく。

図1は、埼京線の敷設・開業と新駅設置に伴う戸田市の地域社会構造変動の方向性を図示したものである。交通ネットワークの変容によって、①東京の都心部(中心都市)への時間距離が短縮してAccessibilityが高まり、②このことが中心都市への通勤・通学者を抱

える世帯を中心とした転入人口を増大させる(=Mobilityの高まり)とともに、③住民の日常生活圏が広がって(=Regionalizationの進展)、ひいては、④地域社会構造に関わるSolidarityが解体し再編される。①中心都市へのAccessibilityの高まりが、生活環境整備の促進を介して⑤Habitabilityを向上させるという流れに関しては、戸田市が、3つの新駅周辺整備の構想をマスタープランの柱に据えており、そうした都市計画事業の展開いかんによっては、Habitabilityが向上していくことも想定されうる。図1と①～⑤の測定指標群はしたがって、埼京線開通の社会的効果測定の指標モデル、分析モデルであると同時に、影響波及の連鎖を示す仮説モデルとして、研究をスタートさせる段階で構想したものである。

研究を開始してすでに27年が経過しているが、同時並行でいくつかプロジェクトを走らせているのに加えて、私の生産性が低いこともあって、1冊の本にまとめ世に問うところまでには依然として至っていないのだが、

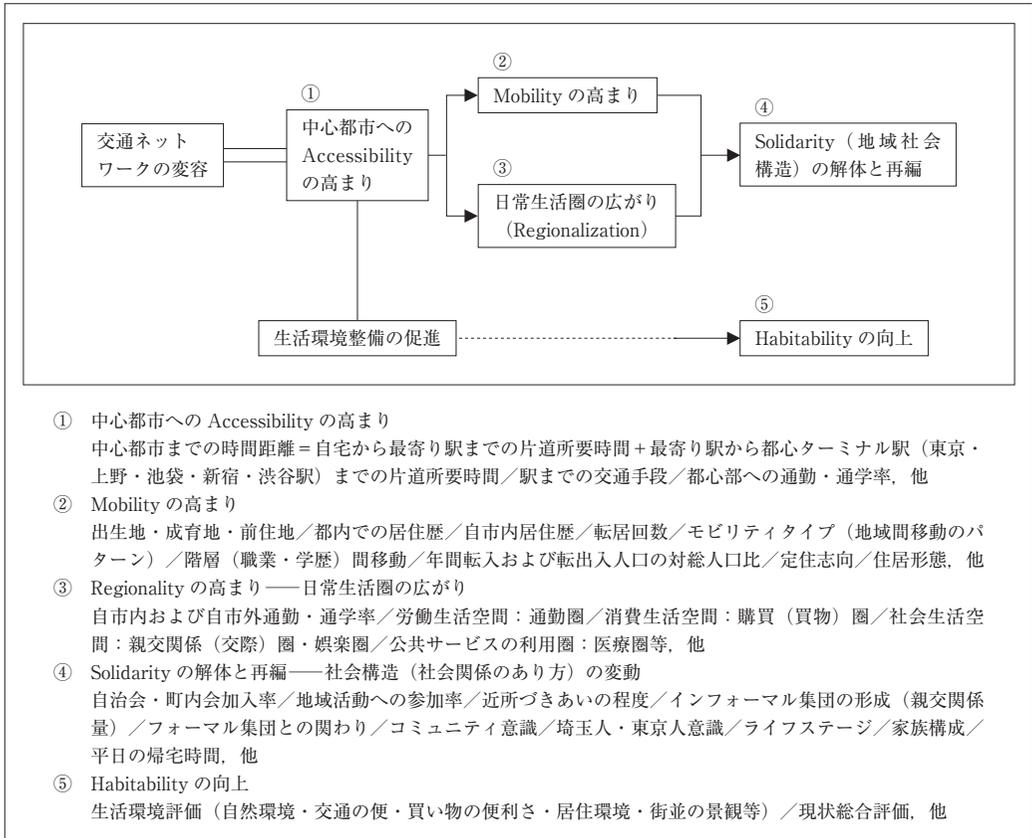


図 1 埼京線開通の社会的効果測定の指標 / 分析（修正 MHASR）モデル

個別論文や調査報告書の類はいくつも発表してきているので、詳細についてはそれら（後藤, 1987, 1997, 2008, 2009a, 2010, 2011c; 鷹取ほか, 1994 など）に譲りたい。調査研究の成果を一言だけ述べれば、おおむね（⑤を除き）仮説通りの交通インパクト（影響波及の連鎖）が確認されている。

では、この研究で、量的調査と質的調査とビジュアル調査の手法上の、データ上の、あるいは、分析上の、はたまた、分析結果ないし解釈上の「架橋」が、いかに果たされているのだろう。正直に告白すれば、マルチメソッド・アプローチを調査設計に組み込んでいたものの、3種類の調査を別々に実施しただけにとどまっており（それぞれから、ほぼ同じ

結論を引き出してはいるが）、フェーズごとの「統合 (integrating)」や「結合 (combining)」ないし「混合 (mixing)」が十分になされているとはいえない。

6 混合研究法の要諦——自覚的で厳格な調査設計

混合研究法の主導者であるクラスウェルらは、データを混合する方法として、1)「統合型」(量的と質的の2つのデータセットを統合または収斂して結果を得る)、2)「結合型」(1つのデータセットの上にもう1つのデータセットを積み上げて結果を導く)、3)「埋め込み型」(1つのデータセットの中にもう1つのデータセットを埋め込むことで、埋め込まれたデータセットが

もう1つのデータセットの支援的役割を果たす)の3つを掲げ、「量的・質的データを単に収集し分析するだけでは不十分である。両者は何らかの方法で『混合される』必要がある」ことを主張した (Creswell and Clark, 2007: 訳7-9)。

クラスウェルらはさらに、混合研究法デザインの主なタイプとして、「トライアングレーションデザイン」「埋め込みデザイン」「説明的デザイン」「探究的デザイン」の4つを掲げ、それぞれにいくつかの変形タイプ(たとえば、トライアングレーションデザインには、収斂モデル、データ変換モデル、量的データ妥当化モデル、複数レベルモデル)があることを、その強みや課題とともに詳しく説いている(同上: 65-87)。研究者には、研究課題に最も適したデザインタイプやモデルを「選択」することが課せられるわけだが、これも単純な話ではない。「タイミングの選定」; 量的手法と質的手法を「並行的に」進めるか/どちらかを先行させて「順次的に」に進めるか、「重みをおく決定」; 両手法の重みを平等に扱うか/どちらかを強調するか、「混合の決定」; 上記のデータを混合する方法をどうするか——1)「統合」の場合は、分析中に2つのデータセットを1つに統合するか/解釈中に2つのデータセットの分析結果を比較・対照させることで統合するか、2)「結合」の場合は、量的データ分析から質的データの収集へとつなぎ合わせるか/質的データ分析から量的データの収集へとつなぎ合わせるか、3)「埋め込み」の場合は、量的デザインの中に質的データを埋め込むか/質的デザインの中に量的データを埋め込むか、といったことも決定せねばならない(同上: 87-95)。なお、ここでいう「量的データ」とはクローズドエンド型質問によって得られた数値データとカ

テゴリカルデータを、「質的データ」とはオープンエンド型質問によって得られたテキストデータ(イメージやAV素材も言葉に変換されるので含まれる)を意味し(同上: 7)、本稿でもこれに従っている。

総じて、クラスウェルらは、調査研究を自覚的かつ緻密にデザインすることの必要性を強調している、と受け止めることができる。こうなると、量的・質的アプローチの「両方の弱点を相殺」(同上: 9)し、「どちらか片方を使用するよりも、研究課題に対する正しい理解を提供する」(同上: 20)ことができるにしても、敷居が高すぎて、多くの研究者は混合研究法を採用することに二の足を踏んでしまうのではないか。

だが、いきなりこの高みに到達することを求めなくても、量と質の「単なる併用」や「安易な折衷」——シンプルでナイーブなマルチメソッド・アプローチ——を脱して、混合研究法に近づける確かな方途ないし実践法がある、と考える。

7 併用・折衷を脱するために——データセットの整序とコンピュータ・アシスト

先に、『ミッドウルトウン』の「月報」に寄せた倉沢の一文を引いたが、倉沢はその後も述べている。「私自身の経験では、自分自身がある理解をするのに直接役立ったのは、モノグラフ的な調査の経験であった。……しかし、自分で『わかった。あいつが犯人だ』と思うことと、他人—陪審員を納得させる説明をすることは違う。標準化調査とは、つまりは陪審員を納得させる手続きなのではないか」(倉沢, 1990: 1-2)、と。

倉沢は、社会調査における信頼性と妥当性について、言語化・カテゴリー化・記号化できるデータ源を用いることと、データ収集お

よび分析の手法が標準化されていることを二大要件とし、この点で標準化調査が優位に立つと今日にあっても主張するが（後藤, 2011b), 「自分自身が理解すること」以上に「陪審員を納得させる説明」ができるかどうか重要であるとの言明は、傾聴に値しよう。別言すれば、質的調査やビジュアル調査の場合、データ収集および分析手法のさらなる標準化を模索しながら、分析や解釈の結果を読者や評価者に認証ないし納得してもらえるエビデンスの提示の仕方を工夫することが何よりも肝要となるのである。

そのためには、何が必要になるのか。端的にいうと、データセットの整序と各フェーズでのコンピュータ・アシストが鍵を握ることになる。そこで再び、私の先の調査研究事例に話を戻そう。「交通インパクトの社会的効果に関する研究」では、1995年の第4次調査までマークカード式集計システム（パスキー）やアンケート集計ソフト（藤吉郎か秀吉）を使って、その度ごとに集計・分析して結果をまとめていた。第5次調査のケース・インタビューも、インタビュアーが原票に手書きしたものを厳重に管理しているだけで、文書ファイルの作成すら不十分なままだった。さすがに、これでは調査を継続している意味が薄れてしまうと反省し、データセットをExcelのワークシートに落とし込むようにし、集計・分析ソフトも汎用性の高いSPSSに全面的に切り替えた。その後、2011年度末までに、第1次～第5次のデータセットもExcelで作直したので、ビジュアル調査を除いて第1次～第7次調査のデータセットがすべてExcelで整序されたことになる。調査票調査のデータセットには、数字（数値とカテゴリカルデータ）の他に、オープンエンド型質問による言葉（テキストデータ）も含まれて

いる。第5次のケース・インタビューのデータセットは、基本的に言葉からなっている。

この作業によって、遅まきながら、全調査データを初めて共通の土俵の上に乗せて、分析できるようになった。数字に関してはSPSSを使って、言葉に関してはテキストマイニングソフト（SPSS Text Analytics for SurveysやKH Coder）を使って、集計や分析を行う体制がようやく整ったことになる。

残るは、ビジュアル調査のデータセットをどう構築するか、である。上述のとおり、景観や土地利用、空間の構成要素の経年的な変化を捉える目的で定点観測（写真・ビデオ撮影）を何度か実施しているのだが、これまでは、映像（静止画と動画）を私自身が凝視することで、量的データ分析によって導かれる地域社会構造変動のありようを肉付けするといい、補助的な利用にとどまっていた。データセットを作成することもしてこなかった。

しかし、ビジュアル調査によるプロジェクト（集合的写真観察法による「東京と東京人」の社会学的研究）を長年実践してきた者として（後藤, 1996, 2000, 2009b, 2011bなど）、これでは不甲斐ない。スーシャル（Suchar, 2004）による、シカゴとアムステルダムにおけるジェントリフィケーションを究明するために行った写真調査が、参考となる。それは、建造物や風景や地形を街区ごとに系統的に写真撮影してドキュメント化し、GTA（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を下敷きに写真目録を作成することによって、物理的・景観的および社会的・政治的・経済的・文化的な変換のパターンやプロセスや意味を明らかにする（写真誘出インタビューも併用）というものである。約30年間をかけて磨かれたこの手法を、交通インパクトの影響波及を明らかにしようとする本研究に適用することは、

十分に可能である。また、写真目録（一覧表）そのものがデータセットを構成する点、Excelでは写真や動画や音声などのクリップアートをドキュメントに挿入することができる点からいっても、これを使わない手はない。データセットには、写真や動画に写り込んでいる諸要素を言葉やコードに変換して入れ込むと同時に、画像そのもの（言葉に変換しきれない部分を含む）も挿入しておけばよい。

かくして、本研究で採用している量的調査も質的調査もビジュアル調査も、Excelでデータセットを整序する道がすべての面で用意できた。ビジュアルデータのテキストデータへの変換も、テキストデータの量的データへの変換も、分析結果を視覚表示することもできる。これらのデータセットを使って、「質的研究や混合研究法をサポートするソフト」と銘打つNVivoによって分析することも、もちろん可能である。

すべてのデータセットをExcelで整えることは、データ間のマッチングの精度とコンピュータ・アシストの効力をともに格段に高めることにつながる。とりわけ、コーディング(coding)、探求と検索(search and retrieval)、データの関連づけ(data linking)、内容分析(content analysis)、データ表示(data display)、知見や理論・モデルを視覚的に表すチャートやダイアグラムの作成(graphic mappingあるいはvisual modeling)などの面で、コンピュータ・ソフトがより力を発揮しやすくなることは間違いない。そして、この整序されたデータセットに基づくcomputer-assisted data analysisが、分析や解釈の結果を読者や評価者に認証ないし納得してもらえるエビデンスの提示につながっていくのである。

8

混合研究法へ誘う「窓」——プロジェクトの完結へ向けての覚書

そもそも、「混合」を必要とする最大の理由は何か。量的データであれ質的データであれビジュアルデータであれ、どれも完全無欠ではないし、弱点のないデータ分析の方法もない。欠点や欠陥をそれぞれに内包しているので、欠を埋めるために「混合」が必要となる。これが、私の基本的なスタンスである。

そして、この際にとくに留意すべきは、ビジュアルデータに内在する多義的で曖昧な性質やデータ分析にまわりついている主観性や恣意性を問題視して「異議」が数多く投げかけられてきたことを受けて、ハワード・ベッカーが述べた「全ての形態の社会科学データはこの問題を実際に含んでおり、一般的に受け入れられ幅広く使われている社会学のメソッドのどれもがこの問題をうまく解決していない」という指摘であり(Knowles and Sweetman eds., 2004: 訳19-20, 288)、私はこの認識に共感する。「写真を撮る時の不可避免的な選択に伴う『主観性』は、多くの人を悩ませている。……(この)選択(フレーミング、フィルム、フォーカスなど)が『科学的な』方法によっておこなわれた」とはけっしていえない。しかしながら、「サーベイ調査、それを表にした統計的なりポート、インタビューやフィールド観察、その記録、転写、解釈などの場合」でも、まったく同様なのである。だからといって、この問題を軽視することはできないのだが、「他のメソッドを用いている同業者よりも多くの重荷を感じる必要はない」。ビジュアル調査だけではなく、質的研究でも量的研究でも、各フェーズで求められる「選択」が主観的であることから逃れることはできないのであり、この事実の重みをし

っかりと受け止める必要がある。

こうしたことを前提にして、私の研究を位置づけ直してみよう。1985年に埼京線が開業して以降の戸田市と、それとの比較対象都市として2005年にTXが開業する前段階からの八潮市に焦点を当てて、交通ネットワークの変容に伴う影響波及の連鎖（社会的効果）を実証的に究明することを目的に据え、これまで30年近く量的調査を主軸とするマルチメソッド・アプローチを押し進めてきた。最終的には、同一の研究課題に関する量的・質的データおよびビジュアルデータを別々に収集し、いくつものデータセットを分析した結果を「解釈の際に（異なる結果を比較させ対照させることにより）統合」（Creswell and Clark, 2007: 訳71）することを目指している。したがって、ここでの「混合」は「統合型」であり、数あるデザインやモデルのうち、トライアングレーションデザインの収斂モデルが最も近いといえる。

2年後の2015年に、埼京線開業後30年、TX開業後10年の節目を迎えるので、目下、2015年前後に戸田市と八潮市で“最後の”量的調査ならびにビジュアル調査を実施して、研究成果を集大成する計画を立てている。私のライフワークが終盤を迎えつつある中で、混合研究法の良き適用例となるような成果に仕上げたい、と決意を新たにしている。

「厳格で質の高い研究は、よくデザインされた調査研究の手順の成果」である（同上：87）。このことの自覚を促し、「混合」を真摯に実践していくことを求めるところに、混合研究法へと誘う「窓」が用意されている。

9 おわりに

社会調査協会の2013年度社員総会・理事

会が開催された13年5月18日（土）、昼休みが1時間半ほどあったので、会場の如水会館から徒歩で5、6分程のところにある東京国立近代美術館へ足を延ばして、「フランス・ベーコン展」を観た。展示作品からは、具象と抽象、実在と空想、実名と匿名、主観と客観、直線と曲線、明と暗、求心と遠心、身体と非身体、この世とあの世、肉塊と透明等々の二項的な「両極の共存」が、たしかに読み取れた。こうしたベーコン作品の特徴の1つといわれる点に加えて、私は、作品と観客の間にガラスを挟み込むことで主体（作品／観客）と客体（観客／作品）を引き離す「隔たり」を意図的に生み出し、観る者のまなざし（存在）を作品が置かれる室内空間とともにガラス面に「反射」させることで、観る側のありようを作品に「反映」させる「対話」の促し方にも心が動いた。さらにいえば、人間と動物と超人との「混ぜ合わせ」方とか、三幅対（トリプティック=3つの画面からなる1つの作品）の構成とか、平面と人物と檻による時空間の多面的な描き方に、トライアングレーション（三角測量）に通じる表現手法が採られていることにも魅せられた。

表現者が各フェーズで埋め込んだ「混合」のいとなみが、作品を観る／読む者のまなざしや理解と交差することによって完結するとき、作品は観る／読む者に強い印象を与えずにはおかない。混合研究法を採用した調査研究の成否も、案外そうしたことに負っているのではないだろうか。

[付記] 本稿の各節の記述は、私がこれまで発表してきた社会調査方法論をめぐる論文等（後藤、1994、1995、1996、2000、2002、2011aほか）に依拠している部分が少なくない。紙幅の制約から、いちいち対応させることはせず、また本稿で引用・参考に供している私が著した文献の書誌情報に関しても多くを割愛せ

ざるをえない。この点をご了解いただきたい。

文献

- Creswell, J. W. and V. L. Plano Clark, 2007, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Thousand Oaks, CA: Sage. (大谷順子訳, 2010, 『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房。)
- Denzin, N., 1978, *The Research Act: A Theoretical Introduction to Sociological Methods*, 2nd ed., New York: McGraw-Hill.
- 後藤範章, 1987, 「交通ネットワークの変容と地域社会構造変動——東京大都市圏内諸地域を事例とした第1次報告」『社会学論叢』99: 72-99。
- , 1994, 「日本都市社会学と社会調査——いかに自己認識し自己転回をはかるのか」『日本都市社会学会年報』12: 1-8。
- , 1996, 「マルチメソッドとダイレクト・オブザベーション——リアリティへの感応力」『日本都市社会学会年報』14: 17-29。
- , 1997, 「交通インパクトの社会学的効果に関する実証的研究——埼玉県戸田市における埼京線開業後12年間の地域社会変動」『社会学論叢』130: 37-57。
- , 2002, 「社会調査の研究と教育をめぐる近年の諸動向——英語圏(特に英国)と日本を中心として」『社会学論叢』145: 1-27。
- , 2009b, 「ビジュアル・メソッドと社会的想像力——『見る』ことと『調べる』ことと『物語る』こと」『社会学評論』60(1): 40-56。
- , 2011a, 「調査方法論」地域社会学会編『新版キーワード地域社会学』ハーベスト社, 54-55。
- , 2011b, 「特集解題: 映像フィールドワークと都市社会学」『日本都市社会学会年報』29: 1-11。
- 石川淳志・佐藤健二・山田一成編, 1998, 『見えないものを見る力——社会調査という認識』八千代出版。
- King, G., R. O. Keohane and S. Verba, 1994, *Designing Social Inquiry: Scientific Inference in Qualitative Research*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Knowles, C. and P. Sweetman eds., 2004, *Picturing the Social Landscape: Visual Methods and the Sociological Imagination*, London: Routledge. (後藤範章監訳/渡辺彰規・山北輝裕・松橋達矢・林浩一郎・後藤拓也共訳, 2012, 『ビジュアル調査法と社会的想像力——社会風景をありありと描写する』ミネルヴァ書房。)
- 倉沢進, 1990, 「社会調査の二つの方法」『現代社会学大系第15回配本 月報』青木書店。
- リンド, R. S.・H. M. リンド/中村八朗訳, 1990, 『ミッドタウン』(現代社会学大系第9巻) 青木書店。
- Mann, M., 1981, "Socio-Logic," *Sociology*, 15(4): 544-50.
- 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋編著, 2013, 『新・社会調査へのアプローチ』ミネルヴァ書房。
- 佐藤健二, 1996, 「量的/質的方法の対立的理解について——『質的データ』から『データの質』へ」『日本都市社会学会年報』14: 5-15。
- , 2003, 「社会調査のイデオロギーとテクノロジー」『年報社会科学基礎論研究』2: 8-25。
- Scott, J. and G. Marshall eds., 2009, *A Dictionary of Sociology*, 3rd ed. revised, Oxford: Oxford University Press.
- 盛山和夫, 2004, 『社会調査法入門』有斐閣。
- Suchar, C., 2004, "Amsterdam and Chicago: Seeing the macro-characteristics of gentrification," in C. Knowles and P. Sweetman eds., *Picturing the Social Landscape: Visual Methods and the Sociological Imagination*, London: Routledge, 147-65. (渡辺彰規訳, 2012, 「アムステルダムとシカゴ——ジェントリフィケーションのマクロな特徴を見る」〔後藤範章監訳書: 217-43〕。)



4

特集論文

「量」と「質」から探る高校生の進路選択

——混合研究法の学校調査への応用——

片山悠樹 (愛知教育大学専任講師)

1 理念から実践へ

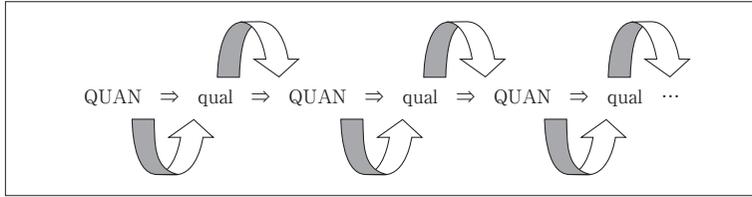
私に与えられたテーマは「量と質を架橋する具体的な試み」であるため、ここでは混合研究法 (mixed methods research) における、①調査デザインの提示、②量的／質的データ結合のための工夫、③分析手順といった具体的な実践について論じてみたい。とはいえ、その実践也多岐にわたり、私の力量ではその多くをカバーすることは困難であるため、かつて私が参加した高校生の進路選択の調査を事例に、学校調査における混合研究法について検討したい。

量／質を組み合わせた研究方法の理念や動向などについては本号の他の執筆者が論じていると思われるのでここでは深く立ち入らないが、量的アプローチと質的アプローチは必ずしも対立的ではないということは繰り返し指摘されてきた (Mills, 1959; Bourdieu and Wacquant, 1992 など)。量／質を対立的に捉えないという理念はけっして新しいものではなく、広く認められていたのである。

近年、こうした理念を実践に結びつける動きが起こっている。1980年代あたりから、量的／質的アプローチを排他的に捉えるのではなく、両者を融合させることで複雑な現実を読み解こうとする実践的な関心が高まって

いるのである。「1980年代の関心事は混合研究法をデザインするための研究手法や手順へと移行しはじめた」(Creswell and Clark, 2007: 訳17) とあるように、従来からある理念(=「量／質の融合」)を現実化しようとする関心(=「理念から実践へ」)が共有されはじめたといえよう。そして、2つのアプローチの融合は様々な論者によって試みられるが、混合研究法は欧米を中心に注目され、「第三の方法論的運動」(Tashakkori and Teddlie, 2003)と名づけられるほどの高い関心を集めている。

もちろん、1980年代以前にも量的／質的データを「併用」した研究は存在していた(教育研究でいえば、Kahl 1953; Woods 1979など)。ただし、必ずしも自覚的にデータの「結合」を図っていたとはいえない面がある。「併用」の段階のままでは、データの「つまみ食い」(佐藤, 2005)といった批判には答えきれない。こうした点を克服する意味でも、混合研究法では量的／質的データをアドホックに「併用」するのではなく、調査デザインを提示し、自覚的にデータを「結合」することが重要となる(Creswell and Clark, 2007など)。日本の教育研究の分野で混合研究法をいち早く取り入れた中村高康(中村ほか, 2006; 中村編, 2010)も、同様の趣旨を「有機的結合」という言葉で指摘している²。混合研究法を適切に活用するポイントは、調査デザ



注) この図は西田亜希子(京都精華大学)の了承を得て使用している(中村ほか, 2006)。

図1 調査デザイン

インの提示と、量的／質的データの結合方法にある。

そこで、以下では混合研究法の学校調査への応用可能性を示すため、調査デザインの提示と、データ結合のための工夫という観点から論じることにした。そして量的／質的データを結合した分析手順を紹介する。そのうえで混合研究法のメリット——仮説の生成と検証——について言及してみたい。

2 混合研究法の実践とその工夫

まずは具体的な調査を事例に、混合研究法の調査デザインの提示とデータ結合のための工夫について述べていきたい。ここで取り上げるのは「大阪大学進路研究会」(研究代表：中村高康)により3年間にわたって実施された調査である。調査対象は、近畿圏にある、公立の「進路多様校」5校に2005年に入学した高校生全員であり、内訳は普通科高校2校、専門高校3校(うち工業高校2校、商業高校1校)である。³

🔍 調査デザインの提示

この調査における量的調査は生徒を対象としたパネル調査(高校入学時から卒業時まで計5回アンケート調査を実施)であり、質的調査としてはアンケート調査の間にインタビュー、参与観察、校内資料収集などが行われた。ア

ンケート調査の間に質的調査が実施されたため(量的調査→質的調査→量的調査→質的調査→…)、量的調査と質的調査を単純に組み合わせたアプローチ以上のメリットが期待される(後述)。

この調査では量的調査に比重を置き、そこに質的調査を組み込むというデザインが設計された。⁴調査デザインを示せば、図1のようになる(量的データ=quan, 質的データ=qual, 比重が高い=大文字)。

アンケート調査の間にインタビューや参与観察などの質的な調査を実施することで、調査協力者(ここでは学校の教師)とのラポールを形成し、さらにはアンケート調査の問題点などの情報も獲得できるといったメリットもある。

🔍 データ結合のための工夫

量的／質的データの結合は、混合研究法における1つの難問である。プライバシーの問題を考えれば、それが容易ではないことは理解できよう。プライバシーに配慮しつつ、データを結合する工夫が求められる。私たちの調査では、こうした問題を克服するため、調査協力者(教師)の理解と協力をできるだけ引き出すことを基本方針とし、工夫を図った。⁵

量的／質的データを結合するうえで、簡単な方法は調査対象者の氏名を利用することであるが、プライバシーの観点から実施は困難

表1 学習意欲×進路希望（工業高校）

進路 勉強をがんばる	進路		合計 (N)
	進学	非進学	
あてはまる	26.0 (51)	74.0 (145)	100.0 (196)
あてはまらない	16.7 (20)	83.3 (100)	100.0 (120)
合計 (N)	22.5 (71)	77.5 (245)	100.0 (316)

n.s.

表2 学習意欲×進路希望（商業高校）

進路 勉強をがんばる	進路		合計 (N)
	進学	非進学	
あてはまる	38.2 (68)	61.8 (110)	100.0 (178)
あてはまらない	33.9 (20)	66.1 (39)	100.0 (59)
合計 (N)	37.1 (88)	62.9 (149)	100.0 (237)

n.s.

であり、必ずしも汎用性のある方法とはいえない。そこで、私たちは生徒のクラス・出席番号を利用することにした。クラス・出席番号はどの学校でも使用されており、学校調査の場合、データを結合するうえで汎用性の高い方法といえる。

ただし、児童や生徒を長期間にわたって追跡調査する場合、クラス・出席番号は学年が上がるたびに変更されるため、変更前と後のクラス・出席番号を同定する必要がある。この同定がうまくなされなければ、たとえば1年生3学期にアンケートを実施し、その結果に基づいて2年生1学期にインタビューを実施しようとしても、同一個人をピックアップすることができなくなってしまう。

この同定作業を行うため、私たちは調査対象校にクラス・出席番号の対応表（変更前と後のクラス・出席番号を対応させた表）を作成してもらい、学年が変わるごとに提出してもらうことをお願いした。そうすることで、外部者である調査者が生徒の氏名を知ることなく、データの結合が個人レベルで可能となる。ただ、こうした方法は対象校の教師にかなりの負担を強いるため、従来の調査以上に理解と協力が必要される。そのため、私たちは調査データをもとに進路指導で利用可能な資料（「進路カルテ」と名づけた）を作成し、こ

れを対象校に提供することで、理解と協力を得た。結果として、混乱や問題もなく、比較的スムーズに量的／質的データの結合が可能となった。

混合研究法では量的／質的データの結合が1つのポイントであり、通常の調査以上に調査対象者あるいは調査協力者の理解と協力が不可欠となる。その理解と協力を引き出すため、ここでは「進路カルテ」という工夫を紹介したが、他にも工夫の余地はあるように思われる。

✿ 分析手順

次に混合研究法の分析手順を紹介しておこう。ここで取り上げるのは調査初期のデータ（高校1年時）を使用した分析事例——専門高校の生徒における進学希望と学習意欲——である。分析手順の紹介が目的であるため、ここでは単純な仮定——進学希望と学習意欲との関連——を置く。分析対象は調査対象校の中から便宜的に工業高校1校、商業高校1校を取り上げる。

量的データ（高校1年時4～5月にアンケート実施）から進学希望と学習意欲の関連をみてみよう（表1、表2）。なお、学習意欲の指標については、表にあるように「勉強をがんばる」への回答の有無に着目した。表1と表2

を検定したところ、5%水準で有意な差は観察されなかった。有意でない要因として学業成績に目をむけて、表中の4つのセルについて中学時の学業成績（5教科の評定平均）の比較を行った。分散分析によるグループ間の差の検定を行ったが、2校ともに5%水準で有意な差はみられなかった（表省略）。

かなり単純な仮定ではあるが、クロス表の結果をみる限り、専門高校の生徒においては、学習意欲と必ずしも関係することなく、進路希望が形成されている可能性がある。専門高校の生徒の場合、なぜ進路希望と学習意欲の関連が観察されなかったのだろうか。その原因の1つとして、勉強をがんばらないにもかかわらず進学を希望している、従来の進路選択の構造からすれば「アンビバレント」な部分に位置する生徒の存在があげられよう（表中の網掛けの部分）。

そこで、「アンビバレント」な生徒に着目し、なぜ彼／彼女らは進学を希望するのか、進学に対してどのような意識を抱いているのか、こうした事柄をインタビューから検討した。手続きとしては、学校を通じて40人全員（表中の網掛けの部分）にインタビュー調査を依頼し、2005年（高校1年時）7月に放課後の学校でインタビューが実施された。長欠やインタビュー時に帰宅していた生徒がいたため、インタビューに応じてくれた生徒は33人である（工業高校15人、商業高校18人）。

ここまでの流れをいったん整理すると、量的データだけでは妥当性の高い解釈を導きにくい部分があるため、インタビュー調査を実施し、質的データを後から組み込むことで、勉強をがんばらないのに進学を希望するという専門高校の生徒のロジックを明らかにするということである。混合研究法の用語でいうならば「順序的説明戦略（sequential explana-

tory strategy）」に該当し（Creswell, 2003）、このアプローチは量的データから予期しなかった結果が出てきた場合、とくに効果を発揮する（Morse, 1991）。

インタビュー結果をみていこう。実際にインタビューを行ってみると、1年生ということもあり、多くの生徒が進学に対する知識は曖昧で、動機も希薄であった。また、個々の生徒の進路選択は多様な要因から成り立っているため、生徒たちの発言から進学希望の要因になりうるものをできるだけ多く取り出し、客観的にカテゴリー化することに努めた。その結果、学習意欲と進学希望が関連しない要因として、下記の4つが挙げられる。

- ・「専門知識」の重視／「5教科」の軽視
- ・他項目優先
- ・親の進学期待
- ・推薦入学の利用

紙幅の都合上、すべての要因には触れられないので、ここでは最も多かった「『専門知識』の重視／『5教科』の軽視」について述べておこう（半数の生徒が該当）。

この要因に該当する生徒たちは、進学先には「5教科」を中心とする学校の勉強ではなく、「専門知識」が重要であると考えていた。もちろん、ここでいう「専門知識」は実体的なものではなく、あくまで生徒の認識上のものである。そのため、「C言語おぼえなあかんかなあ」と特定の知識に言及した生徒もいれば、メイクアップやヘルパーに関する知識を漠然と思い浮かべた生徒もおり、生徒たちがいう「専門知識」には幅がみられた。ただし、「専門知識」にはある共通性が存在する。その共通性とは、学校の勉強（＝「5教科」）とは異なる次元に「専門知識」が存在しているという認識である。

また、学校の勉強（＝「5教科」）に対しては

軽視や苦手意識が観察されたものの、「専門知識」の勉強に対してはやる気に満ちている様子がインタビューで随所にうかがえた。「専門知識」の重視／「5教科」の軽視といった対称性は、インタビューで度々あらわれた。下記の事例はこうしたことを象徴している。

進学を希望しているのに勉強をがんばらない理由として、進学に必要なのは自らの興味・関心とリンクした「専門知識」であるという生徒たちの認識があげられる。そして、その「専門知識」は学校の勉強とは別物であると考えているようである。

〈インタビュー事例〉

I：インタビューアー，S：生徒

I：高校の勉強ってというのは（進学先の学校に入ることに）関係ある？

S：高校の勉強？ あんまり関係ない。
…略…

I：高校でこれからどうがんばりますかっていうので丸を付けてもらったんだけど、「勉強をがんばる」に丸がついていないのは、そうするとどういうことになるのかな？

S：勉強よりも将来的に必要なものかを……。この勉強ってのが専門なのか座学のほうなのか、わからなかったんですよ。

I：そうかそうか。そうすると、この時点（アンケートの時点）ではどっちのほうにとったことになるのかな？

S：この時は座学のほう。

I：そうすると、座学の勉強はそうじゃなくて、むしろ専門のアニメだとか、あるいはこっちの話だったら電子、通信とかね、そういうのだったらやる気はあると。

S：はい。

学校の勉強（＝「5教科」）と「専門知識」という2つのタイプの知識は連続的であるという想定に立てば、上記のような生徒たちの認識は、勉強からの逃避と解釈できよう。たしかに、学習意欲が低い様子はインタビューから何度かうかがえた。だが一方で、「専門知識」に対する学習意欲が高いのも事実である。こうしたことを踏まえると、勉強からの逃避とは別の解釈が成り立つかもしれない。「5教科」と「専門知識」の連続的關係という想定からいったん離れ、「専門知識」へ言及する生徒たちの発言を鑑みれば、勉強をがんばらないのに進学希望という「アンビバレント」な現象は「専門知識」への意欲を介して生じている可能性がある。

この事例から浮かび上がった仮説として、「5教科」を中心とする学校の勉強への意欲がなくとも、「専門知識」への意欲が高校生の進学希望を促進する要因となりうるということである。もちろん、ここで示した関連は1つの仮説にすぎない。ただ、量的／質的調査の対象者が同一であり、両方のデータを個人レベルで結合させているため、ここで提示された仮説はある程度信頼性の高いものであると思われる。そして、こうした仮説は後続⁸の量的調査により検証可能となる。

3 混合研究法の活用に向けて

混合研究法の学校調査への応用可能性を示すため、調査デザインの提示、データ結合の工夫や分析手順について述べてきたが、混合研究法の実施には調査対象者や協力者の理解と協力が不可欠となる。混合研究法のキーであるデータの結合には、このことがとくにあてはまる。社会調査法の教科書を開けば必ずといっていいほど登場する事柄ではあるが、

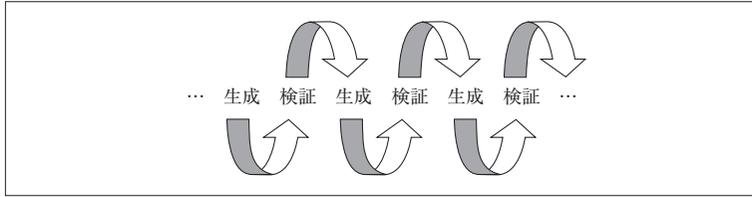


図2 混合研究法における仮説の生成／検証

混合研究法でも同じである。混合研究法では手間やコストがかかる分、より一層の理解と協力が必要とされるかもしれない。きわめて平凡な指摘であるが、重要な手続きである。ここで取り上げた事例では、調査協力者（教師）の理解と協力を得るための「進路カルテ」という実践を紹介したが、こうした実践は調査対象者や協力者に応じて工夫されるべきである。また、対象者のプライバシーに配慮したうえで、実践された工夫は論文などで報告されてもよいと思われる。成功した工夫を共有していくことで、混合研究法の実践に関する議論が活発になり、より洗練された方法が生み出される可能性がある。いまのところ、日本の教育研究において混合研究法が応用された分析事例は少ないものの、今後は増えていくことが予想されるため、実践的な工夫を共有していくことが必要となろう。

それと同時に、データ収集時のプロセスを明記することも重要となる。なぜ量的／質的データを収集するのか、それはどのようなデザインのもとで実施されたのかを明確にしなければならない。そうしなければ、単に量的／質的データを併用した「つまみ食い」状態となり、導き出される知見の妥当性が損なわれてしまう。

最後に、上記で取り上げた分析事例を踏まえて、混合研究法の特長について指摘しておきたい。混合研究法のメリットとして、精緻な解釈や複雑な現象への理解があげられる

(Tashakkori and Teddlie, 2003)。なかでも、大きなメリットは仮説の生成と検証を同一の調査プロジェクトで行えることである。一般的に量的データは仮説検証に、質的データは仮説生成に優れているとされるが、両者を組み合わせることで仮説の生成と並行して検証を行うことが可能となる (Bryman, 1988; Tashakkori and Teddlie, 2003)。今回紹介した調査ではパネル調査を組み込んでいるため、生成と検証は螺旋状の関係となる (図2)。

先に挙げた事例に即していえば、専門高校では進路希望の形成に対して「専門知識」の影響がみられるという仮説が生み出された。こうした仮説の検証は、その後のパネル調査で検証可能となる。詳細は割愛するが、私はこの仮説を発展させ、工業高校生の職業選択に与える「専門科目」の影響について量的データをもとに検証したことがある (片山, 2010)。図2に即していえば、「進学希望と学習意欲の関連性なし」(量的データによる検証) → 「進学希望に及ぼす『専門知識』の影響」(質的データによる生成) → 「工業高校における職業選択と『専門科目』の関連」(量的データによる検証) と、螺旋状に発展していく。混合研究法は通常の調査よりも手間やコストがかかるかもしれないが、仮説の生成－検証の螺旋的關係という観点からみても、そのメリットは大きいと思われる。

注

- ・1 もちろん、こうした指摘は量的／質的アプローチのどちらか一方を用いること自体を批判するものではない。単一の方法では抽出されない視点を提出することを強調するものである。
- ・2 中村と同じように、川口（2011）も混合研究法の動向を丁寧にレビューし、自身が行っている調査事例に基づきながら教育研究への応用可能性について言及している。ただし、データの結合方法やその工夫に関してはあまり触れられていない。
- ・3 調査の詳細は中村編（2010）を参照。
- ・4 「進路多様校」を対象に、質的調査に比重を置き、量的調査を組み込む調査デザインを設計したものと、古賀（2006, 2007）があげられる。
- ・5 ここでの工夫はパネル調査にも適用された。
- ・6 「進路カルテ」とは、アンケートの結果をもとに、1人ひとりの生徒の進路希望や、進路に関する質問への回答を一枚のカード形式にまとめたものである。進路指導や個人面談で使用してもらえよう、こうした形式を提案した。なお、「進路カルテ」はアンケートが実施されるたびに作成され、クラスごとにファイリングし、担任と進路担当の教員に渡された。
- ・7 「進路カルテ」という工夫が、スムーズなデータ結合と直接関係しているとは一概にいえぬものの、5校すべてで3年間にわたりアンケート調査（5回）、インタビュー調査（生徒=5回〔延べ198名〕／教員=4回〔延べ29名〕）および参与観察が実施できた点を踏まえると、対象校にとって「進路カルテ」を通じたデータの還元はそれなりのインセンティブとなっていたと推測される。
- ・8 詳細については中村ほか（2006）を参照。

文献

- Bryman, A., 1988, *Quantity and Quality in Social Research*, London: Unwin Hyman.
- Bourdieu, P. and L. J. D. Wacquant, 1992, *Réponses: pour une anthropologie réflexive*, Paris: Édition du Seuil. (水島和則訳, 2006, 『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー, 社会学を語る』藤原書店。)
- Creswell, J. W., 2003, *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches*, 2nd eds., Thousand Oaks, CA: Sage. (操華子・森岡崇訳, 2007, 『研究デザイン——質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会。)
- and V. L. Plano Clark, 2007, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Thousand Oaks, CA: Sage. (大谷順子訳, 2010, 『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房。)

- Kahl, J. A., 1953, "Educational and Occupational Aspiration of Common Man Boys," 23(3): 186-203.
- 片山悠樹, 2010, 「専門高校の職業選抜」中村高康編『進路選択の過程と構造——高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房, 118-40。
- 川口俊明, 2011, 「教育学における混合研究法の可能性」『教育学研究』78(4): 386-96。
- 古賀正義, 2006, 「進路多様校におけるフリーター産出過程の継時的研究——高校卒業時までの第1次調査の結果から」『教育学論集』48: 185-218。
- , 2007, 「進路多様校におけるフリーター産出過程の継時的研究(2)——高校卒業後の第2次調査の結果から」『教育学論集』49: 57-85。
- Mills, C. W., 1959, *The Sociological Imagination*, New York: Oxford University Press. (鈴木広訳, 1965, 『社会学的想像力』紀伊國屋書店。)
- Morse, J. M., 1991, "Approaches to Qualitative-Quantitative Methodological Triangulation," *Nursing Research*, 40(1): 120-23.
- 中村高康・片山悠樹・西田亜希子・藤原翔, 2006, 「学校社会学における Mixed Methods Research の可能性」『大阪大学教育学年報』11: 69-91。
- 中村高康編, 2010, 『進路選択の過程と構造——高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房。
- 佐藤郁哉, 2005, 「トライアングレーション(方法的複眼)とは何か?」『インターナショナル・ナシングレビュー』28(2): 30-36。
- Tashakkori, A. and C. Teddlie eds., 2003, *Handbook of Mixed Methods in Social & Behavioral Research*, Thousand Oaks, CA: Sage.
- Woods, P., 1979, *The Divided School*, London: Routledge & Kegan Paul.



5

特集論文

EBM の視点からミックスドメソッドを考える

高木廣文 (東邦大学看護学部教授)

1 はじめに

初めての研究である卒業論文から一貫して、私の研究は疾病のリスク因子を探ることを目的とする疫学研究という量的研究であった。これまでの研究は、厚生(労働)省の特定疾患(難病)、がん、糖尿病、循環器系疾患などの疫学研究であった。これらは、特定の集団を研究対象とした調査研究が主であり、そのため統計的な分析手法を重視し、統計解析のためのプログラム作成は必須であった。そのため現在でも、HALBAU(ハルボウ)という統計学ソフトの開発も手がけている(高木, 2007a)。最初の就職先であるアメリカ環境保健研究所から帰国し、看護系大学に就職したときに、初めて質的研究というまったく異なるパラダイムからなる研究方法が存在することを知ることになった。正直な感想として、私もご多分に漏れず、なんて非科学的な研究なのかと驚き、こんな方法をやっていて大丈夫なんだろうかと思った。その後、文部(科学)省統計学数理研究所で仕事をしていたので、当然、質的研究については考えることもなかった。この間に、エビデンスに基づく医療(Evidence Based Medicine: EBM)が重視される傾向がかなり強くなってきた。EBMの基盤となる考え方は、統計学に基づく研究

デザインと解析方法であった(高木・林, 2006)。

私にとっての大きな転機は、1999年からタイでHIV/AIDSの問題に数年間に渡って関わったことだと思う。そのJICA(国際協力機構)のHIV/AIDSのプロジェクトの終了後に、プロジェクトに関係した地域の病院やHIV/AIDSとともに生きる人々を調査対象に、学生を連れてインタビュー調査や病院見学に行くようになった。このときに、インタビューに基づく研究などをしたことで、このようなインタビューデータに基づく質的研究のもつ科学性を考えるようになった。

そのような状況下で実施されるインタビューやテキスト解釈による質的研究、つまりは自分たちが行っているような質的研究は、科学的なエビデンスを与えることができるのかということに、強い関心をもつに至った。さらに、人間を対象とするような学門領域で、パラダイムが異なるといわれている量的研究と質的研究の各方法論を、統一的に理解することは可能なのか、という問題にも強い関心をもつようになった。

運良く、2回連続して5年間に渡って科研費をもらうことができたので、2001年と03年に全国の看護系大学教員を調査対象として全数調査を実施した(高木・西山, 2002, 2004; 西山・高木, 2002, 2004)。このときの調

査結果からわかったことは、①エビデンスを得るためのアプローチの重要性は回答者の約9割が認めていること、そして、②看護研究には量的研究が向いているとするのは44.1%であったが、質的研究のほうが向いているとするものは66.7%であったことである(高木, 2005a)。この調査結果は、看護職者はもともと患者の心理面に強い関心をもっていることを示しているものと考えられた。しかし、EBMの方法は、基本的には量的研究の方法論であり、質的研究が看護領域での研究に適しているとしても、質的研究がエビデンスをもたらすのかという問題は、なおさらきわめて重要な意味をもつように私には思われた。

面白いことに、すでに2003年の調査時に「トライアングレーション」という用語を47%が知っていると回答し、さらに13%が実施したことがあると回答していたことである(高木, 2005a)。トライアングレーションとは、異なる方法や対象などを同一の研究で用いることで研究の信頼性や妥当性を高めるための方法論といえるものであり、ミックスドメソッドもその中に含まれる。この回答の数値が実際の値より高いように思われたが、2002年にフリックの著書の翻訳が出版されており(Flick, 1995, 訳2002)、かなり評価が高かった影響もあるのではないかと考えられる。当時、日本において今でいうところのミックスドメソッドによる優れた研究が本当にあったのかは、文献検討をきちんとはしていないので定かではない。

上述のようにJICAによるタイでのHIV/AIDSに関するプロジェクトに関わっていた関係で、北タイでHIV/AIDSの人々を対象として面接調査などをやり出したこともあり、質的研究の方法論に非常に興味をもつようになった。このため質的研究を科学的方法論と

して、量的研究と同様な立場からを統一的に理解できないだろうか、看護系大学教員対象の全国調査をやりながら何かヒントになるような方法論はないかとあれこれ文献検討をしていたのだが、なかなかよいアイデアは浮かばなかった。そのときに目にしたのが、西條剛央による『構造構成主義とは何か』という書物(西條, 2005)であった。新進気鋭の若手の書いたこの本は、かなりのインパクトをもっていた。哲学的問題である主観-客観問題が研究方法においても、量的研究と質的研究において生じており、そのような無益な相互対立や批判の状態を解消するために提唱されたメタ理論が構造構成主義である。詳細は西條(2005)を参照していただきたいが、その基本的な考え方は「関心相関性」に基づく研究方法の選択により、主観-客観問題に根ざす量的研究と質的研究の難問を解決しようとするものであった。

その後、構造構成主義の考え方に基づいて、いろいろと自分なりに考えて、とくに池田清彦の構造主義科学論が指摘するように、「科学とは同一性の追求である」(池田, 1998)ならば、「質的研究は科学である」という結論に至った(高木, 2007b, 2011)。

ミックスドメソッドに関しては、2007年に開催された第27回日本看護科学学会学術集会で「現象を読み解くためのMixed Method——質的研究法と探索的データ解析法の共働」というランチョンセミナーを行った(高木・萱間, 2008)。かなり広い会場を設定していたにもかかわらず、入りきれないほどの参加希望者がいたため、不本意ながらもかなりの参加希望者を断らなければならなかった。それでもその参加者のあまりの多さに、看護分野でのミックスドメソッドへの関心の高さを実感した。そのときの討論や、その後

に質的研究の方法論上の問題など、自分なりに考えてきたことなどを踏まえて、ミックスドメソッドに関するいくつかの問題について考えてみたい。

2 ミックスドメソッドの実際は

ここまで用語について気にせずを使用してきたが、「ミックスドメソッド」とは、どんな形式であれ「質的研究法」と「量的研究法」の両方を研究デザインとして採用している研究方法を示す用語としよう。ミックスドメソッドをその研究上で用いる方法論の内容からいくつかに分類をすることもできるのだが、本稿ではとにかく「単一の方法論を用いた研究デザインから得られる結果よりも、より研究上の現象説明や解明に有効な複合的な研究デザイン」を示すことにする。

2007年の日本看護科学学会で、ミックスドメソッドのランチョンセミナーを行ったのだが、それ以前にすでに2005年の日本質的心理学会で、「質的研究と量的研究の統合」というテーマでシンポジウムを行っている(高木, 2005b)。当時は、哲学的に同一の基盤に基づいて、量的研究と質的研究の科学性を示したいと思っていたため、このようなテーマとなったものである。

ところで、カナダのアルバータ大学には質的研究の方法論のための研修や学会を行うための International Institute for Qualitative Methodology という施設があり、ほぼ毎年定期的に Advances in Qualitative Methods Conference を開催している (AQM, 2013)。質的研究に関心をもつようになってから、科研費が採択されたときには、可能な限り研究発表をするようにしている。昨年は開催されなかったため同じ研究施設が主催する他の学

会で発表したのだが、今年は6月21～23日にアルバータ大学内で開催された。今年の学会のテーマとして「質的研究方法におけるイノベーション」を掲げており、その中の1つとしてミックスドメソッドを取り上げている。

ミックスドメソッドは、これだけ騒がれている方法ではあるが、系統的な文献検討はしていないので、その全体像は把握していない。しかし、実際に上手くいった看護分野での実際例としては、児童虐待の予防のための母親へのスクリーニングと介入に関する Kayama らの研究がある (Kayama et al., 2004) (この論文の詳細に関しては、高木・萱間 [2008] に概略が紹介されている)。本論文では、虐待を行う母親13名のフォーカスグループインタビューに基づく質的研究を行っているのだが、一方でその背景となるピアサポートグループ1,536名についての基本属性と虐待尺度の質問紙調査を実施し、子どもと気が合わないと感じる母親は、虐待得点が有意に高いことを示している。この量的研究の結果から、質的研究の対象者が本当に虐待していることを示すことができたものと考えられた。これにより質的研究として行われたフォーカスグループへのインタビューが、本当に虐待をしている母親のものを保証することができ、テキスト解釈の結果が信頼できるものであることを示すことができたということである。これはあらかじめ研究デザインを立案する段階で、フォーカスグループインタビューを行うのみならず、そのグループのバックグラウンドを客観的に把握するために、質問紙調査の項目として虐待尺度項目を含めるように考慮して、調査計画を立案した成果であるといえるだろう。

その他のミックスドメソッドの研究例としては、新しく提唱された概念を測定するため

の尺度開発のための研究が多くあるのではないだろうか。これまで看護系の大学院での博士論文のための新しい尺度開発に関する研究指導を、実際にかかなり行ってきたことからの私の印象である。

そのような尺度開発のための研究では、最初に研究課題である概念に関する概念分析を行うのであるが、文献がほとんどないような場合には、概念枠組みを探索するための糸口として、質的研究を行うことは一般的な研究プロセスの一部である。その後、質的研究から得られた当該の概念に関する測定を行うために、その尺度の質問項目を整備し、尺度開発のための本格的な質問紙調査を行うことになる。これもたしかにミックスドメソッドの1つといえないこともない。しかし、尺度開発での研究方法は、まず質的研究を行い、その成果をもとにして研究の枠組みを構築し、その後で量的研究を行うものである。したがって、最終的な研究目的は共通するのであるが、どちらかといえば2つの研究方法を1つずつ連続的に行うものであり、同時に両方の方法を行うというものではないだろう。

量的研究と質的研究から得られた結果が相互補完的になるような研究デザインが、本来のミックスドメソッドではないだろうか。この点からいえば、上記のような尺度開発での異なる方法論を用いた連続した研究をミックスドメソッドと呼んでよいのか疑問が残るが、とにかく質的研究と量的研究の両者の協働により、研究上の現象についての理解がより進むように、研究デザインを考える必要があることは確かだろう。

3 ミックスドメソッドへの疑問点は

ミックスドメソッドに対する関心の高まり

は理解できるのだが、いくつかの疑問もまたある。主な疑問点として、①量的研究と質的研究では基本的な哲学的な基盤が異なるのではないか、②量的研究に質的研究を組み込む必要はあるのか、ということである。

この前者の問題については、量的研究と質的研究の背景となるパラダイムの相違があげられる。これについてはすでに述べているのだが、やはり気になる点である。量的研究は基本的には、唯物論的世界観に基づく論理実証主義的な方法論がその基盤にあり、ある現象を測定などにより数値化したデータにすることで、客観的な現象の把握を行うような方法を用いていると考えられる。一方、質的研究においては、研究上の現象へのアプローチやテキスト解釈の立場によって大きく異なっている。すなわち、その哲学的な背景として、解釈学的現象学を基盤にしたり、社会構成主義であったり、シンボリック相互作用論などをその基盤にもっていたりする。このように、量的研究と質的研究では、その方法の基盤にある基本的な考え方に相違があり、パラダイムの首尾一貫性を考えると、「結果良ければすべて良し」といった、何となくご都合主義的な感じをミックスドメソッドは与えなくもない。

この問題を解決するために提唱されたのが、西條による超メタ理論である構造構成主義なのだが、実際のところ私はまだ心の底では納得できないでいる。大きな理由としては、量的研究者の多くは研究をするためにわざわざ哲学書は読まないと思うので、どのような主観-客観問題を解決するための理論が提唱されようと、自然と心に生じてくる疑念を完全に払拭するような、真の相互理解を得るのは困難だろうと考えられるからである。この点から、②の疑問点も生まれてくる。

一般的にいても、実験的な研究や調査を主とする量的研究を行っている研究者は、普通はトライアングレーションやミックストメソッドという方法論を聞いたことも読んだこともないのではなかろうか。医学領域での臨床研究などはEBMの影響で、たとえば新薬の開発研究・治験などでは、ケースとコントロールの比較研究において、統計学的な無作為割付を行わないような研究は、価値の低いものとみなされる傾向が強いようである。そのような状況のもとで、量的研究に質的研究を追加したり、組み合わせたりするといったような研究は、きわめて稀なのではないだろうか。というよりも、わざわざ主観的解釈に基づく解析結果を、研究成果に加える必要があるのかと疑問をもつのではないだろうか。

しかしながら、質問紙調査を分析する場合、自由記述の箇所に記載された意見をまとめて、補足的に考察を加えるといったことはあるかもしれない。ただし、せっかく、無作為に対象を選んだとすると、かえってそのような記載をすることで、偏りのある結果を研究成果に導入することにもなりかねない。そのため、せいぜい今後の参考意見程度の価値しかもたせられないのが普通だと思う。

看護領域の研究では、自記式無記名の質問紙調査においても、調査対象が何を考えているかを把握したいと思うためか、自由記述の回答欄を結構入れたがる傾向があるように思われる。しかし、実際に自由記述のデータを分析する場合には、そのまとめた結果の一般性は保証されないので、予備的な調査にしか用いられないという認識がまず必要と思われる。

一方では、質的研究においては、情報提供者の背景の記述などに、量的研究の成果を記載することで、研究対象の一般性を示したり、

特殊例であれば、その特殊性を明確にするなどの利点はあると考えられる。

どちらの研究方法を主としているかにより、このような不均衡な扱いが生じると考えられる。なぜこのような方法論上の不均衡が生じてしまうのだろうか。そもそも、量的研究と質的研究を両方とも用いるといっても、その重みが等しいような研究はありえないのではなかろうか。

すでに指摘しているように、もともと量的研究が外部世界の事象（もの）の研究に適しており、質的研究は心的な内部世界の事象（こと）の研究に適していると考えられる（高木, 2011）。したがって、研究の目的に応じて、研究方法は使い分けるべきであるし、そのようにしている研究者が大部分だと思われる。そう考えると、ミックストメソッドを用いるべき研究というものは、人間の主観世界と客観世界の両方を扱うような研究ということになる。それはどのようなことを目的とした研究なのだろうか。

4 ミックストメソッドが必要な研究とは

本来はパラダイムもその対象領域も異なる2つの方法論からなる質的研究と量的研究を混合して行うことが、研究目的に合致する研究とはどのような研究なのだろうか。

たとえば、文化人類学や医療人類学のように、人に関わる現象として心的事象から社会事象などを、様々な角度から多岐に渡って扱う必要がある学門領域では、そのような方法論を使わざるをえないのではないだろうか。必然的に、このような研究では、論文も長文になるだろうから、通常の学術誌には掲載しにくいものとなる。学位論文のようなものや書籍でないといすべてのデータを解析した結果

を記述するのに困るかもしれない。

前述したように、何かの尺度を新たに作る場合などは、文献に基づいた概念分析を行うとともに、予備的な調査として研究目的に沿った面接調査を行い質的研究を行うことも多い。その後、その成果に基づいて尺度開発のための量的研究を行うというプロセスをとるのだが、このような研究もミックスドメソッドの範疇に入るようである。この場合には、研究のメインは明らかに量的研究であり、質的研究は予備的研究の地位に貶められている。もともと、このようなタイプの研究は、多くは心的な事象をあたかも客観物であるかのように扱うための尺度を作るという方法論に基づくものであり、量的研究のほうがその現象説明や解明にとって優れているという前提に立っている。したがって、多くの質的研究者にとっては納得のいかない話かもしれない。

質的研究が主であった場合でも、Kayamaらの研究(Kayama et al., 2004)のように量的研究を組み合わせることで、研究の一般性が増すことがあるのは事実だろう。質的研究は量的研究者からみると、どちらかというとき怪しい目で見られがちである。理由は単純で、①対象者数が極端に少なく任意抽出であること、そして②テキスト解釈が主観的であること、の2点に集約されるのではないだろうか。本当は、これらの点は、研究上まったく問題のないことなのだが、疑問に思うだろうことは理解できる。こういった点から、研究対象の背景などの客観情報として示せることは、量的に扱って示せば、それなりに理解しやすいし、研究上の現象説明にも有用であることは確かだろう。

この点から考えると、看護分野の研究はミックスドメソッドで行うのに適しているのかもしれない。看護は医療の分野において、治

療的(キュア)な側面と療養上の世話(ケア)の両面を扱う必要があるので、患者の身体などに関する客観情報と精神的な主観情報の両方を扱うことが多いものと考えられる。とくに、看護研究は患者のケアに関心を向けていることが多いために、患者の心の問題にきわめて関心が高い。前述したように、私たちの実施した以前の調査では、看護研究には質的研究のほうが向いているとした回答が66.7%あり、量的研究の44.1%を大きく上回っていたのだが、この結果も、看護分野において患者の心的事象に関する研究が多いことの反映だろうと考えられる。

5 おわりに

ここまで、とりとめもなくミックスドメソッドに関係するだろうと、私が考えている量的研究と質的研究に関わる問題点を述べてきた。うまい具合に研究上の現象の解明のために、ミックスドメソッドが有用であればよいのだが、何にでも使えるという方法論ではないように考えられる。そもそも2つの異なる方法でデータをとり、異なる解析を行うのであるから、うまくその結果を論文にまとめないと、ページ数も多くなるだろう。

質的研究が基本的に、人の心的事象を対象としていることを考えると、メインが質的研究の場合に、ミックスドメソッドはその力を発揮するのではないかと、現時点では私には考えられる。

文献

- Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung, Rowohlt Taschenbuch*, Humberg: Verlag GmbH. (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳, 2002, 『質的研究入門——(人間科学)のための方法論』春秋社。)

池田清彦, 1998, 『構造主義科学論の冒険』 講談社学術文庫。

Kayama M., A. Sagami, Y. Watanabe, E. Senoo and M. Ohara, 2004, "Child Abuse Prevention in Japan: An Approach to Screening and Intervention with Mothers," *Public Health Nursing*, 21 (6): 513-18.

西山悦子・高木廣文, 2002, 「日本看護系大学協議会 会員校教員を対象とした EBN に関する意識調査 (2) 看護教育に関する調査結果」『第 22 回日本看護科学学会学術集会講演集』 399。

西山悦子・高木廣文, 2004, 「看護系大学教員の質的研究の知識と実践に関する意識調査 (2) 質的研究の講義受講経験と質的研究方法の関係」『第 24 回日本看護科学学会学術集会講演集』 529。

高木廣文, 2005a, 「看護系大学・大学院における研究手法の教育——量的研究法と質的研究法の統合的理解を目指して」『インターナショナル・ナーシングレビュー』 28(2): 47-51。

———, 2005b, 「質的研究法と量的研究法の統一的教育を目指して」『日本質的心理学会第 2 回大会 アブストラクト集』 61-62。

———, 2007a, 『HALBAU7 によるデータ解析』 シミック株式会社。

———, 2007b, 「質的研究は科学としてエビデンスをもたらすか」『看護学雑誌』 71(8): 712-15。

———, 2011, 『質的研究を科学する』 医学書院。

———・萱間真美, 2008, 「現象を読み解くための Mixed Method——質的研究法と探索的データ解析法の共働」『看護研究』 41(2): 139-52。

———・林邦彦, 2006, 『エビデンスのための看護研究の読み方・進め方』 中山書店。

———・西山悦子, 2002, 「日本看護系大学協議会 会員校教員を対象とした EBN に関する意識調査 (1) 看護研究に関する調査結果」『第 22 回日本看護科学学会学術集会講演集』 398。

———・西山悦子, 2004, 「看護系大学教員の質的研究の知識と実践に関する意識調査 (1) 質的研究の信頼性と妥当性に関する意識」『第 24 回日本看護科学学会学術集会講演集』 528。

西條剛央, 2005, 『構造構成主義とは何か——次世代人間科学の原理』 北大路書房。

参照 URL

AQM, 2013, <http://www.cvent.com/events/12th-annual-advances-in-qualitative-methods-conference/event-summary-5bae444a05ae44e9bb7d63b0f41d-2fa5.aspx>

